

宮川經輝著

活基督

全

318-121

7
11

例言

一 吾人生命の生命なる基督を學び、之が解説に従事する者が、其傳記を著さんと欲するは當然の希望なるべしと雖も、基督の人格たるや、之を仰げばいよゝゝ高く、之を學べばますます深く、余の如き淺學謏才、殊に人格の低き者に於ては、近き將來に此希望を充すの日なかるべき歟、然れ共余が生涯の中、或は宿望を達すべきの秋あるべきを思ひ、其準備の一として、當春以來基督の心情、性行、教訓等に就いて説教したりしを以て、其中の速記十種を撰び出版する事となし

たり。

「活基督」てふ標題は余元より其妥當を缺くものたるを知る、唯余が基督に對する信念は「爾は活神の子キリストなり」と云ふ使徒ペテロの告白に外ならざるを以て、之に因てかく名けたり。

一會員山田都一郎兄は速記術の名手なり、兄や余が説教演説を速記する爰に年あり、嘗に言語のみならず、余が精神を寫して紙上に躍如たらしむ、今録して兄の勞を多謝す。

明治三十六年十二月

著 者 識

活 基 督

目 次

第一章	基督傳序論	一
第二章	基督降生の大目的	十九
第三章	基督の幼時と其教育	三十七
第四章	基督の姿	五十七
第五章	基督の教訓	七十七
第六章	基督教訓の内容	九十四
第七章	愛隣の妙旨	百十六

第八章 基督の權威……………百三十六

第九章 基督の犠牲的精神……………百五十八

第十章 死に對する基督の眞情……………百七十六

活 基 督

第一章 基督傳序論

宮川 牧 師演說
山田 都一 郎速記

イエス彼に曰けるは我は途なり眞なり生命なり人もし我に由ざれば父の所に往こと能ず約一四〇六

基督教の中心はキリストであるからして基督教界に於ける神學論争の燒點はいつもキリストに關はる議論であつた勿論實際上の信仰なり道徳なりも矢張りキリストに基づいたものであるパウロは何を傳道いたしたかヤコブやヨハネは何を傳へたか乃ちイエスキリストを

傳へた此のキリストは決して基督教から取り除くことの出来ないものであつて假りに之れを取り除いたと云ふ日には基督教は零となるであらう。

今茲に申し上げたいことは十九世紀の半より以前今から五十四五年前まではイエスキリストは神の子又は人間となれる神と云ふ考へが一般に廣まり即ち超自然的の人物だから地上に於けるイエスの生涯即ちマリヤの腹に宿り其乳房を哺みナザレ村のいぶせき茅屋の中で育ち餓ゑたり渴いたり勞れたりして此世を渡りたまふたことに就いては深く研究する必要がなかつた言換ゆればイエス即ち神だから奈何にして成長になつたか又奈何にして智慧學問を得られたかそれは構ふことはない個々之れを研究する人があればそれは異端を唱ふる怪しからぬ奴だと云つて斥けたものである是猶ほ三百年前に伊太

活 基 督

活

基

督

利の天文學者ガリリオが望遠鏡を發明し之にて美の女王と仰がれて居つた月さんの顔を睨め從來人々が嬋媚たる玉兔と稱へた其の玉の顔には山あり谷あり川の跡あり海の跡あり恰ど菊石面を見るやうなと唱へたときに無學なる人々の怒りを招いだやうな譯であつた尤もイエスキリストは奈何に研究したからと云つて缺點を見出だすことは出来ないけれども科學的にキリストを研究することは大不可即ち不敬事件であつた今より四百年前にマーチンルーテルと共に宗教改革のことに力を盡したメランヒトンと云ふは非常な學者であつて種々なる著述もあるが彼がキリスト傳を著はしたことを聞かない又佛蘭西の宗教改革家にして學者と云ふ上に於いては當時之と肩を比ぶる者はなかつた今日でも其人の著はしたインスチテュートと云ふ書物は神學者が金科玉條と仰ぐ珍らしい良書であるそれくらゐな書

活 基 督

物を著はしたカルウキンがキリスト傳を著はしたことを聞かない彼の時分の大學者は基督傳には手を着けなかつたのである。而して當時聖書の中で何が一番能く人々に仰がれて居つたかと尋ねて見ると、約翰傳は確に其一であつた。約翰傳と云へばイエスキリストの一代記のやうであるが、本傳の最初から最終までを讀んで見ると、成程歴史の部分もあるが、其重なる部分は記者がキリストに關する出來事と其教訓に就いて自家の考を加へたのである。約二十〇三十一に「此書を録せるは爾曹をしてイエスの神の子キリストなる事を信ぜしめ之を信じ其名に因て生命を得させんが爲なり」と著述の目的が録してある。即ちイエスキリストは神の子だと云ふことを人々に信ぜさせたいと思つて筆を執つたと云ふのであるから、其の目的に關はつたことばかりをズツと録いて來たと云ふことは明白である。

活 基 督

私共の子供の時には日本外史と云ふ書物が大層流行つて居つた。私は初めから終りまでは一度か二度より讀んだことはないが、初めの二三卷は幾十度讀んだかも知れない。それで第一卷の外史氏曰と云ふ所などは殆んど諳記して居る。然るに今日は何うであるかと云ふと、日本外史はあれは頼山陽が徳川幕府は憎い奴だ、實に何うも朝廷を蔑如にして天子を狭き御所の中に押籠めまいらせ、實に不忠の奴だと云ふことが腹の中に一杯満ちて居るけれども、さう陽に云ふと著者の首が飛んでしまふから、或は北條氏或は足利氏と云ふやうなものを引ツ張つて來て、尊氏は不正い奴だ、高時は酷い奴だ、或は時政は何うだとか、義時は斯うだとか云つて力を極めて攻撃し、其の攻撃の鋒は何方へ行くかと云ふと、徳川幕府の横腹へ向ふたのである。此書を愛讀した結果は勤王心の勃興となり、尊氏の木像の首を打ち落すやら、其像體を鞭つと云ふ

活 基 督

やうになり更に進んで徳川幕府は憎い奴だ之れを倒さなければならぬと云ふになつて来た日本外史は正しく勤王の議論を唱へる爲に書かれたとすれば非常に貴き書物だが今日史學上より論ずるときは左程貴いものではない此の約翰傳も矢張りイエス・キリストが神の子であるといふことを證明する上に於いては非常な價値があるけれども之れを地上に於けるイエス・キリストの傳記として見るには昔の人々が之れを尊重した程でない。

其次ぎに昔尊重された書物はパウロの書翰である其の中でも豫て申し上げて置いたやうに羅馬書哥林多前後書加拉太書即ちパウロの四大書翰は紀元五十八年頃には出来上つて居つた四福音書中の一が未だ録かれて居らない時分に此四大書翰だけは録き著はされて居つたものであるからして大變に價値を有して居る此のパウロは亞刺比亞

活 基 督

の荒野に入つて三年の間頻りにキリストのことを研究したと云ふのは靈のキリストを學んだのである又エルサレムに登つてペテロやヨハネやヤコブに會ひ段々と地上に於けるイエス・キリストの事を聴き大にキリストの教を咀嚼したので先づ靈のキリストを見て而して後に肉體のキリストを見たのである(マチソン著聖パウロの發達に據る)それでパウロの書翰はイエス・キリストの傳を研究する上に於いては決して重なるものではない是れは英語で云ふ「サイドライト」とあつて茲に中央に一の大きな燈火を點け而して四ツも五ツも外の方へ燈火を點けて照すと云ふやうな譯で側面からキリストの傳を照す爲には必要なものである右御話申す如く今より五六十年前までは靈のキリスト即ち神の子なるキリストに就いて深く信じ込んで居つたから地上に於けるイエス・キリストのことは研究しなかつたと云ふのである。

活 基 督

ところが十九世紀の半になると段々キリストの傳が出て來たので一番最初に出たのが獨逸のチュビンゲン學校のストラウスのキリスト傳で一千八百三十四年に第一卷を出し其の翌年に第二卷を出した。ストラウスがキリスト傳を出したと云ふので先づ獨逸の人々は之れを見て目を眩したところが翻譯になつて英吉利に渡り亞米利加に渡ると英米の人々は開いた口が塞がらないと云ふやうに驚いた。何故驚いたかと云ふと此のストラウスが何うも乙女妊んで子を生むと云ふことはない筈である。キリストが奇跡を行ふたなど云ふ其様な方角違ひのことがあるべき筈のものではないと云つて從來堅く信ぜられたことを大抵打毀してしまつたから是れはエライものが出て來たと云ふので大騒動をして居るとそこにニヤンドルと云ふ此人は以前猶太人でメンデルと云ふ名であつたがキリストを信じてニヤンドル

活 基 督

即ち新らしい人と改名したのである。大學者が一千八百三十七年即ちストラウスのキリスト傳が出てから三年経ない中にキリストの傳を出した。それでマア開いた口の塞がらなかつた人々は之を讀んで初めて口が塞がり胸の動氣の高まつて居つた人は是れでマア瘧が治まつたと云つて少しく安心をしたと云ふのである。斯くストラウスはキリストを論ずるに當つて道理の上からして是れは學問に叶はない。是れは理屈に適しないと云つて其の學問に叶はない。理屈に適しないものはみな除いてしまはうとしたのであるがニヤンドルはさうでない。斯う云ふ意味のものである。如彼云ふ意味のものであると云つて之れを辯駁し且つ好い説明を加へたと云ふのであるからして今ね話したやうに大抵の人々は皆胸を撫で下げた。當時の英吉利は獨逸に比らべて見ると餘程遅れて居つたが一千八百六十幾年と云ふに『エキシホーモ

活 基 督

「其人を見よ」と云ふ書物が出来た、其人を見よと云ふのは神の子イエ
 スと云のではない、人の子イエス、人間なるイエスを見せやうとしてイ
 エスの傳を録いた人がある、ところが英吉利では某の著はした書物と
 してそれが出ると忽ち大不敬事件となるのだから匿名にて突然出版
 したのである、サアさうすると英吉利にては學者も無學者も皆呆氣に
 取れてしまひ、獨逸に於いてはエライ奴が出てキリストは奇跡を行は
 ない、キリストはマリヤの腹から生れたと云ふが決して乙女の腹から
 生れることはないなど、云ふことを聞いたが、早其の惡魔が此の英吉
 利へ飛んで來たと云ふので英吉利は大騒ぎをやつた、すると先日死去
 したジョセフ・バーカルと云ふ大説教者が「エキシデオス」と云ふ書物を
 録いた、即ち「神の子を見よ」と云ふ書物を出したのである、是は先きの「人
 の子を見よ」と云ふ書物に比すれば幾らか劣て居る、佛蘭西に於いては

活 基 督

ルナンと云ふ文學者が頻りに小首を捻つて考へて居つた、是れは何て
 も部屋の中にてキリストの傳を考へて居るやうなことでは不可ない、
 イエス、キリストのお生れになつた猶太の國へ出掛けて行つて、ベツレ
 ヘムはどんな所か、エルサレムはどんな所か、ナザレはどんな所か、此の
 眼で一ツ見て來やう、さうして又猶太人民は何う云ふ習慣、風俗である
 か、之れをも一ツ見て來やうと云ふので、遂にルナンはズツとパレスチ
 ナを廻つて佛蘭西に歸り來り、さうしてイエス、キリストの傳を録いて
 出した、すると直ぐに英語や獨語に翻譯になつて廣まつたから、佛人は
 勿論英獨の人々が之れを讀んで、イヤルナンと云ふ者はひどい男だ、何
 うもイエス、キリストをば神の子でないと云ふやうな口調で書いて居
 ると云ふので、是れ又大騒ぎであつた、ところが此度は又獨逸に於いて
 先きに書物をしたストラッスの弟子分のやうな人でカイクと云ふ者

活 基 督

があつて、一千八百六十七年にイエスの傳を著はした、サア人々は之れを讀んで再び驚いた、私も今より十六七年前に此傳を讀んだ、其後亦之れを手に取つて讀んだことがある、私は又聞をする、尾緒が附いて來るから、惟理論者の著述を研究して置くがよからうと思ふて、ストラッスの著いたのとカイクの著いたのを讀んで見た、さうして是れならば大丈夫自分の心のびくつくことはないと思つて、それを充分腹の中へ入れたのであるから、其後種々様々に不信の風が吹いて來ても、人々が信仰を失つたと云つても、私は神の恩寵に依つて少しも動搖が來なかつたのである。

扱て右の『エキシホーモー』は誰が録いたかと云ふことは其時は分らなかつたが、段々穿鑿をした所がケンブリッジ大學の近世歴史の教授シリレー博士の録いたものであると云ふことが分つて來た、其シリレー

活 基 督

と云ふは『英國の膨脹史』や『英國の成立史』を出した非常にエライ學者であつたから、今日では多の人々に愛讀さるゝやうになつた、實は私が英國や米國を騒がした此の『エキシホーモー』と云ふ書物を手に取つて讀んで見たときには、キリストは此點だと云ふ所が自分の腹の中に確かまつたのであるが、當時の人々のびくついたのは神の子イエス、キリストと云ふことだけが頭の中に入つてあつて、人の子イエス、キリストと云ふ考がなかつたからである。

今日宣教師なり其他の人々がキリスト傳の中で最も良いと思つて一巻づゝ藏めてあるのは猶太人にして信者に成つたエデルシャイムと云ふ學者の著はしたキリストの一代記である、それから英米に於いてはカノンフアールと云ふ人の録いたのも用ゐられて居る、又獨逸のワイスと云ふ學者の録いたのも用ゐられて居る。

活 基 督

右のやうな譯で今より五十五六年前までは神の子イエス・キリストと云ふことは研究せずして深く之れを信じて居つたと申しても宜い、それから十九世紀の半以後は人の子イエス・キリストと云ふことを深く研究して、此のイエス・キリストは神の子でもあり人の子でもある即ち神人であるといふ問題に就いて尙更に深く研究を加ふることになつたのであるから、二十世紀の略に出會つた私共は兩方の側を此所に並べて置く即ち盾の一面ではない、その兩面を見ることが出来るやうに成つて扱つてイエス・キリストは如何なるお方であるかと云ふことを味ふことの出来るのは、確かに十九世紀が過ぎ去つて二十世紀の初めに棲息する私共に取つては實に天よりの賜と申さなければなるまいと思ふ。

そこで今括りを着ける爲に申し上げて置きたいことは、キリスト傳の

活 基 督

研究に就いて昔の人は内傳に重きを置いた即ちキリストの腹の中に重きを置いたのであるが、今日では先づキリストの外傳に眼を注げなければならぬ、外傳と云ふとイエス・キリストを外から見つた所である、即ち歴史上に現はれたるイエス・キリストを研究すると云ふのである、それに就いて何う云ふ書物が最も大切であるかと云ふと馬可傳である、是れは福音書の中では最も早く録されたものであらう、さうして此はマコが録いたけれども實はイエス・キリストの高弟ペテロが幾十年の間彼方此方で演説をし、説教をし、又人々に説話をしたことをマコがよく咀嚼して録いたのである、それから馬太傳の方は何うであるか、是れはマタイが録いたのではなからうと云ふ説もある、即ちマタイの弟子がマタイの輯めて置いたものや説話たことに基づいて録いたものであらうと云ふのである、そんなら何故其人の名が録いてないかと

活 基 督

云ふと其人は餘り名高くない人であつたから遂に人々が忘れてしまつたらうと云ふ説である。兎に角是れはマタイから來たに相違ない。而して其善い所は何うかと云つて見ると或は馬可傳或は路可傳或は約翰傳を捜しになつても、マタイが五章から七章の終りまでに輯めて居るやうな山の上の説教は見出すことが出來ない。又マタイ十三章には、キリストの例話を集めて居るからして其邊を見のには馬太傳に若くものはない。然らば路可傳は何うであるかと云ふと此はパツロの演説説教及び説話に基づいて録き綴つたものであるからして其所に價値がある。此の方は異邦人に聞かせる積りであつたからして種々に異邦人に分らない猶太の言語や何かに基づいて説明がしてある。又醫者であつたからキリストの御身體のことや日々のごとに就いて氣を注げて録いたのであるから其邊は路可傳の最も良い所であらうと思ふ。

活 基 督

れてマカを中心にしてルカとマタイを兩側に備へ、そうして地上に於るイエス、キリストをね調べになつたならば其のイエス、キリストは私共の目の前に或は王公の如く或は大將軍の如く或は大人物として或は神の子としてお現はれになるであらうと思ふ。私共は之れを研究するに就いてキリストのね生れなされたる土地は何様な所であつたか、土地の感化がキリストに及んで居つたか何うか、キリストのね生れなされたる時代の人民は何う云ふ風俗であつたか、何う云ふ宗教を信じ居つたか、或は何様な状態であつたかと云ふことは是れ又研究しなければならぬ。彼れや是れや其所に集まつて來て、さうして體を以て此の世の中をね歩きなされたるイエス、キリスト、即ち歴史上に現はれたものが私共の目の前に顯はれ來るであらう。

活 基 督

つたかと云ふことに就いて學ばなければならぬ、それを學ぶには馬太傳なり約翰傳なり、パウロの書翰も宜しい、或はヤコブの書翰も宜い、それはキリストの御教訓に就いて種々使徒方の傳へて居る所のものを學ばなければならぬ。

さうして終りに私共の學ぶべきことは何であるかと云ふと昔の人がもう此上もなく尊んで居つた約翰傳、是れはキリストの内傳である、即ちキリストの思想意識性格などを知らうと思ふならば約翰傳に據らなければならぬ、其の約翰傳と云ふものもヨハネが録いたものではないのであらうけれども、矢張りヨハネの弟子が先生の咀嚼したものを受け入れて録き著はしたものである、故に四福音の中に於いてキリストの聖意を知ると云ふ點から云へば此の約翰傳に優るものはない、最も奥深き思想最も高尚き性格其のキリストが天の父と我とは一ツだ

活 基 督

と仰せられた即ち神とイエスは同格だと云ふ意識をばヨハネが充分に録き著はして居るからして是れくらゐに尊い書物はない、兎にも角にもフエーベルンの申した如く最も善くキリストを知る者は最も良きキリスト信者であると云ふ一言は頗る適切である。

第二章 基督降生の大目的

それ道肉體と成て我儕の間に宿れり我儕その榮を見に實に父の生たまへる獨子の榮にして恩寵と真理にて充り

(約翰傳第一章十四節)

茲にキリストの降生と云ふのは英語の「インカーネーション」と云ふ字であつて佛書の化身と云ふ字に當る本文に『それ道肉體と成て』と記してあるが此の肉體と成つてと云ふのでは意味をなさない何か神が肉

活 基 普

體を被つて世の中へ降りに成つたと云ふやうな意味に取れるが、決してそう云ふ意味ではない。此頃出來た二十世紀新約全書には「それ道人間と成つて」と改められている。それ道人間と成つて我儕の間に寄り、それが眞個の意味である。次は何が人間と成つて此の世に生れたかと云ふ問題である。或人はイエスと云ふ人間に神の靈が乗り移らせられたと云ふ併し此の意味はさうではなからうと思ふ。紀元五十八年以内の作なりと云ふパウロの四大書簡の一なる哥前十五〇四十七に「第一の人は地より出て土につき第二の人は天より出たる主なり」とあるが、この第一の人と云ふのはアダムであつて、第二の人は即ちイエス、キリストは天から出まされた主なりと云ふのである。其後數年を経て出來た腓二〇六には「彼は神の體にて居しかども」と録いてある。夫れから四福音書の中で最も早く出來たと云ふ馬可傳には「劈頭第一に」これ

活 基 普

神の子イエス、キリストの福音の始なり」と記してある。何が人間となつて生れて來たとも何う云ふやうにして生れたとも録いてない。是れが神の子イエス、キリストの教の初めだと云ひ、此所にはイエス、キリストを神の子と稱してある。其次に出來た馬太傳路加傳には聖靈に由て生れたと録いてある。而も奇跡的に生れたと記してある。一番後に出來たと傳へらるゝ約翰傳には大層むづかしい哲學の言を以て「道肉體と成て我儕の間に寄り」と録いてある。何故こんなむづかしく録いたかと申すことに就いては、當時アレキサンデリヤにフキローと云ふ學者があつて「ロゴス」説を唱へ、ノスタクと云ふ宗派があつて何か小むづかしい哲學を唱へて居つたから、三福音書の如き説方では到底斯う云ふやうなむづかしい頭腦の人々に神の子イエスのことを傳ふることには出來ないと思つたものであらう。初めから約翰傳は非常にむ

活 基 督

づかしく高尚にキリストのことを説いたものである、兎も角以上申し上げた所から割り出して来ると、何が此の世の中に降つたかと云ふことに就いては、マコは神の子と云ひ、マタイとルカは聖靈に因て奇跡的に生れた所の神の子と云ふのである、ヨハネは天地開闢の初めから神と共に在らせられた道が生れたと云ひ、使徒パウロは此の地から出て来た人ではない、天より人が生れた、神の體を持つて居つた人が生れたと斯う云つて居る、それは種々に説明の仕方もあるが、兎も角も私共のやうな人間ではない、一種特別の人と云ふ意味であらうかと思ふ。其の一種特別の人と云ふは、私共人類とは撰を異にする者が生れたと云ふのである、其の人類と撰を異にするると云ふ意味は何うかと云へば、先づ神と比較たうへから申せば、キリストは徳性の上に於いては、殆んど神のやうな方である、否更に一步を進めて云へば、神人が世に降つ

活 基 督

たと申す譯になつて来る、次に之れを人間と比べた上から云へば、昔から今日に至るまで此の世の中に生れたる者、即ち女の産みたる人間のうちでは、聖人であらうが至人であらうが一人として罪のない者はなかつたが、たゞイエスキリストは全く罪のない人であつたと云ふことは學者の定論である、かくイエスキリストは神と比べて見れば、少なくとも神の如き人と云ふことになる、尙踏み込んで考ふれば、其の徳性の上に於いては、神と同一の人格を備へた方である、人間と比べて見れば、罪のないと云ふ一言で、早人間以上に在らせられたと云ふことが明白になつて来る、それで約翰傳の記者が約三〇三十一三十二に於いて、バテスマのヨハネの言として、斯う申して居る、天上より来る者は萬物の上にあり、地より出る者は地に屬、その言とて、ろも地の事なり、天より来る者は萬物の上に在、彼は自ら其見しところ聞し所の事を證と爲に

活 基 督

其證を受るものなし』と天より來らせられたお方の仰しやる所は、天即ち神のこれを仰せられる此の世界から出て來た所の者は何様なエライ人物であつても此の世界のこれを云つて居るので、其人は低い地に屬くものだと云ふのであるからして、此所に大變な違ひが存して居ることを認むる次第である、先きに申し上げた如くにイエス、キリストを見る時には何うしても一種特別のお方が此の世の中にお降りになつたと申さなければならぬので、今日の問題は何の爲に其様な高尚な一種特別のお方が此の世の中へお降りになつたかと云ふことである。

第一に諸君は先日「キリストに於ける神」と云ふ説教をいたしたことを御記憶であらう、神の權威即ち權威の神の實在し玉ふことは、此の大いなる天地萬物を見れば、其所に明らかに現はれて居る、また神の正義即ち正義の神が在らせらるゝと云ふのは、世界各國の歴史を見れば正しく現れてある、即ち正義の神が正しき人には正しき報を與へ、惡しき者には惡しき報をなされ、正しき國には正しき報を與へ、惡しき國には惡しき報をなされると云ふことが明らかに現はれて居る、只正義の神の權威の神と云ふことだけであるならば、茲に何もイエス、キリストを天より降さなければならぬと申す必要は起らない筈である、たゞ茲に正義の神の權威の神と云ふだけが分つたと申すことであれば、私共人間はたゞ戰々競々として顔ひ上り、全く畏縮するのみで、何か上から非常な重量を以て綿を押へたやうに押し潰されてしまふと云ふより、他はなからうと思ふ、其の證據には舊約全書を開いて見ると、彼の猶太人は權威の神、正義の神と云ふことを聞いたときには、全く縮み上つてしまつた、賽六〇を開いて御覽なされると、イザヤのやうな預言者でも神の聖前

活 基 督

ち正義の神が在らせらるゝと云ふのは、世界各國の歴史を見れば正しく現れてある、即ち正義の神が正しき人には正しき報を與へ、惡しき者には惡しき報をなされ、正しき國には正しき報を與へ、惡しき國には惡しき報をなされると云ふことが明らかに現はれて居る、只正義の神の權威の神と云ふことだけであるならば、茲に何もイエス、キリストを天より降さなければならぬと申す必要は起らない筈である、たゞ茲に正義の神の權威の神と云ふだけが分つたと申すことであれば、私共人間はたゞ戰々競々として顔ひ上り、全く畏縮するのみで、何か上から非常な重量を以て綿を押へたやうに押し潰されてしまふと云ふより、他はなからうと思ふ、其の證據には舊約全書を開いて見ると、彼の猶太人は權威の神、正義の神と云ふことを聞いたときには、全く縮み上つてしまつた、賽六〇を開いて御覽なされると、イザヤのやうな預言者でも神の聖前

へ出たときには、ア、われは心の汚れたる唇の汚れたる者だと云つて、縮み上つたと云ふことが録いてある。さう人間が縮み上つてしまつては何の歡樂もなければ平和もなく、實に火の消ぬたやうな荒涼寂寥の世界となつてしまふのであらう。

そこでイエス、キリストが現はれなされたと言ふのは充分に神の仁愛即ち仁愛の神を現はすと云ふ目的であつた。神は天の父である。即ち其の神は愛で在らせらるゝと云ふことを現はす爲に降りになつたのであるから、豫々か話し申す通りに此のイエス、キリストは初めから終りまで殊にバプテスマのヨハネに洗禮を御受けなされてより磔刑に上りなされるまでの三年の御状態を見るときには、手を動かさなければ其所に愛が現はれ、足を舉げなされるれば其所に愛が現はれ、口を開きなされるれば其所に又愛が現はれるのでイエス、キリストは

活 基 督

活

基

督

何う見ても全く仁愛の生涯を御送りになつたと申す外はない。此のイエス、キリストが何の爲に此世へ降りになつたかと尋ねて見ると、天地萬物は神の權威を現はし、世界の歴史は神の正義を現はしたが、夫れだけでは天の御本性が未だ現はれて居らない。未だ天の父の御本性が現はれなかつたならば、其の天の父が眞個に現はれたと云ふことは出来ない。何うしても神は即ち愛なりと云ふことを現はさずしては止まれない。それで或人は新約全書を開いて之れを深く研究した上、全書の總てが火に焼けてしまつたとしても、約壹四〇八「神は即ち愛なればなり」と云ふ一句だけが残つたならば、其れで基督教は全體が残つて居ると申しても宜いと云つて居る。そこでキリストが此の世の中へ降つたと言つても、第一の目的は神の御本性である所の愛を現はす爲であつたと申しても差支へはない。

活 基 督

夫れならば第二は何であるか、折角神の御姿に象つて造られた人類は罪と悪との爲に殆んど元の形を失つてしまつた、其の元の形を失つたと云ふことに就ては、諸君は羅一〇十八以下を精讀されたならば、自分一個としては夫れほどの罪人であるとは思はなかつたが、茲にパウロが書き出した罪人の有様を見て、今日わが日本人々が陰暗い所に於いて如何なる罪惡を犯して居るかを考へて見るならば、成程人間が神の御姿と云ふ點は何所にあるか、殆んど其痕跡を認る事が出来ない位だと考へなざるであらう、全然神の姿は消え失せてしまつたのである、私は曾て堀川監獄に参り千幾百人の罪人が柿色の衣類を着て大なる土間の筵の上に列座せる前に立つて話をいたしたことがあるが、成程監獄に這入つて苦しい目に遭つて居るから、莞爾とした麗はしい顔貌をした人はない筈であらう、何れの方面に眼を向けて見ても、到底

活 基 督

神の姿に象つて造られた人間とは思へない様な有様であつた、どうしても神は茲に第二のアダム即ち新しい人間の模形を造りなされる必要が生じて來た、エデンの園にお造りなされたる第一のアダムの子孫若しくはそれと同様に世の中へ現はれた所の人間は、みな神の姿を失つたのであるからして、茲に第二のアダムと云ふ新模形をお現はしなさらなければならぬことになつて來た、其の新模形としてお現はれなされたのがイエス、キリストである、此のイエス、キリストは當時の人々が吟味をしても、ピラトが審問をして見ても、亦爾來二千年歴世の學者輩が研究を加へても、一點の非難すべき所を見出さなかつた、實に諸君父なる神はイエス、キリストに依つて茲に滿然たる笑顔を以て顯はれたまふた、また人間の理想としては罪のなきイエス、キリストが茲に温平たる容貌を以て現はれたまふたのである、ところが現在の人間

は如何であるかと云ふに、罪の上に罪を重ね、悪の上に悪を作つて今お話し申上げるとき有様であるから彼の罪と悪との中に沈んで居る人間に向つて、天の父は慈愛の父であると云つて聴かせると、そんなことが信ぜられるものであらうか私は幼少いときに親に別れて叔父叔母の手に掛つたところが彼等は私を苛酷く取扱ひ遂に戸の外へ突き出してしまつた、それより後私は盗をするやうになつて来たので、私の心の中には神も佛もあるものかと云ふやうな念が屢々起つたからして、さう云ふ温なる愛の神が在らせられるなど、云ふことは思はれぬと云ふであらう、又一方の醜業婦は父は私を賣り、兄は私を苦界に沈め、實に血を分けた父なり兄なりが斯様なことをするのであるから、何うして其様な慈悲の神正義の神が在らせられるものであらうかと云つて承知をいたさないであらう、それなら茲に此様な罪のない新しい模

活 基 督

活 基 督

形即ち人間の理想としてキリストがお現はれになつたからと云つて聴かせたならば私共は理想も思想もあつたものではない、其様な結構なお方がお生れになつたと云つても私共には何んの關係がありませう、毒を喰はば皿迄と云ふことがある、既に此の苦界に沈んで早や自分の身が穢れた以上は、欺されるだけ人を欺し、取るだけ金を取り、もう自分分は世の中の人鬼夜叉と云はゞ云へ、悪魔と云はゞ云へ、此の悪根性でやり通しますと主張には違ひない、そこで第三には何にが必要となつて来るかと申せば、愛の神を現はすが爲めに降たりたまふた愛のキリストは、此の罪人なる人間を救はんが爲めに何か非常なる手段、否、已むに已まれない所から御自身の生命をお棄てなさらなければならぬ、と云ふことになつて来たのである、若し彼等罪人に向つてお前は深く父母を恨んで居るけれども、其の父母はお前の爲に一命を棄てた

活 基 督

ぞと申し聴かせたならば、鬼の眼にも涙あり、ホロリと涙を流すに違ひない。私は曾て難波驛梅院に於て四百の遊女の前に立つたときには、もう何も彼等の前に云ふべきことはなかつた。それだけだ。ただ父母が其子女に對する慈愛は斯の如きものであると云ふことを談して、だんく其談が進んで來ると、恰も水を撒たやうに座が静まつて、彼方でも眼を潤ふし、涙を流す者が出て來たから、成程是等の人の心の中でも親の愛が分るかと思つたのである。イエス、キリストが何程道を説きなされても何程人間の理想をお説きなされても、それだけで人間が善くなるものではなかつたのである。イエス、キリストが遂に傘はれて磔刑の上で生命をお棄てなされたときに、それまではこの愛の神は手を持つてお招きなされると云つても、又新しい理想はこれだと云つて示されても、他くまで我を張つてこれを聞かなかつた氷のやうな心を持つて居つた

活 基 督

罪人が、そのときにはイエス、キリストが我等の爲に生命をお棄てなされたことと云ふことを聴いて、腹が張り裂けるやうになり、初めて恰も東風吹き來りて池の氷を解かすが如く、其氷のやうな執拗つた心が解けてしまひ、ア、私のやうな者の爲に生命を棄て、下さる救主があるならば、今日より更まつて眞の人間になりませう。父よ、我を憐みたまへと云つて重を負へる者、疾れたる者は其愛の神の聖手に、全く寄り縋つて來るやうになつたのである。實にイエス、キリストが世の中へ降りになつた第三の目的は此の罪人と愛の神を結び付けて、茲に初めて罪人が悔い改め、わが父と仰げば、父なる神はわが子よ、今日汝の罪は赦されたりと云つて下さるので、初めて私共人間が神の聖前に蘇生つて來ると云ふ譯になるのである。

第四は何であるか、キリスト、イエスが此の世の中へ降りに成つたの

は、宗教道徳の世界に於いて新たなる紀元をね開きになり、總ての事物を新たになされたのである。蓋しソクラチスは希臘に生れ、釋迦は印度に生れ、孔子は支那に生れて、幾らか當時の社會を一新したが、キリストイエスに至ては、全世界を新たにすべき新紀元をね開きになつたのである。

蓋し第一に神に就ける考が更まつて來た。キリスト、イエスがね降りなされる前には、彼方此方の國に於いて神の在らせらるゝと云ふことは略分つた。猶太人の間にも先きにね話申した權威の神義の神が在らせらるゝと云ふことは分つた。然るにキリスト、イエスがね降りになつて其天の神と云ふのは、即ち愛である。わが父である。と云ふ實に温かなる思想を人々の心の中へお植附になつた。それを神に對する恐怖心が段段柔らいて來て、わが父、わが神と云つて、恰も幼兒が母を慕ふが如くに

活 基 督

活 基 督

世界の信者が此の神をね慕ひ申すと云ふことに變つて來た。第二には人間と云ふ者は實に詰らないものであつて、或は家來たる人間は君の爲には器具の如くに役はれ、下等の人間は主人の爲には牛馬の如くに役はれる。と云ふやうな譯で、希臘邊に於いては不具の子供が生れて來ると是れは國家の爲にならなと云つて皆殺してしまつた。我日本に於いても今尙幼兒を殺す者がある。維新前中以上の人々の家族に於いても餘り多く子供が生れて來ると之を壓殺したと云ふやうなこともあつた。然るにキリスト、イエスが此の世の中へね生れになつて、神の子は其の生命を棄つる程に人間をお愛しなされたからして、黑人でも何でも人間と名の附く者は神の聖前に於いて非常に尊い者に成つて來たのである。人間に對する考が全く變つてしまつた。過日も或人に對つて、能く君等は車夫に向ふと、車夫アと云つてエライ勢を示し、輕蔑をし

たやうな言を云ふけれども、歐米人の眼から見たならば、人間が四足の
 獸類の如くに車を輓くと云ふことですら、實に人間を辱かしむるの甚
 だしきものであると思つて居るのに、其の同胞兄弟なる我々が尙ほ其
 上に車夫アと云ふやうなことを云つて辱かしむるのは實に濟まない
 譯である、と云つたことである、そこでキリストの人に對する御考が私
 共の頭の中へ這入つて來たならば、車夫は恐るか橋の上で慈悲みを乞
 うて居るやうな乞食に對しても、人間として之れを敬まひ之れに對し
 て相當の禮を盡くさなければならぬと申すことを知らねばならぬ、
 第三には愛と云ふことは、舊約全書の上へには文字として存じて居つ
 た、孔子の教へにも博ろく愛する之れを仁と謂ふと申す言があるから、
 多少其の實も存じて居つたのであらう、然らばイエス、キリストがわれ
 爾曹に新らしき誠を與ふと仰しやつた其の仁愛が、いかに此の無慈悲

なる人間の中に形を現らはして來たかと云ふことは、最早諸君が御承
 知になつて居る次第である、斯くの如くにして算へ來つたならば、今一
 時間あつても二時間あつても到底キリスト、イエスが世に降りにな
 つてから新たにせられた事物を算へ上げることは出來ない、たゞ一言
 に之れを申すならば、キリスト、イエスは此の世界の歴史を新たにす
 る爲に世の中へ生れになつたのである、或歴史家がキリストに世界の
 歴史を一變された、と云つたのは蓋し適評である。

第三章 基督の幼時と其の教育

イエスこれと共に下りナザレに歸て彼等に順ひ居り其母これら
 の凡の事を心に藏ぬ、イエス智慧も齡も彌増り神と人とに益愛せ
 られたり(路二〇五十一、五十二)

活 基 督

イエスの幼時に就いては、四福音書の記者は何れも皆沈黙を守れるが故に、今日となつては何う云ふやうに御成長になつたか、又如何なる教育を受けになつたか、之を調ぶることは頗る困難である、併し唯今讀んだ本文にもある如くに「ナザレに歸て彼等に順ひ居り其母これらの凡ての事を心に藏ぬ」とあるから、其の御幼少のことを一番詳しく知つて居つたのは母親のマリヤである、其のマリヤがありし事柄は深く心の中に秘め置いたと録してある、イエスが十字架架上に死あそばすと、きに母親のマリヤを最愛の使徒ヨハネへ托しになつたから、後にヨハネは小亞細亞のエペソへ参り其所に住居したので、マリヤを一緒に連れ申し、我家に於いてイエスに代り孝行を盡したと云ふ言傳がある、そこでルカが小亞細亞の方へ旅をしてエペソのヨハネの家へ参り、親しくマリヤに面會をいたし、御幼少の時代のことを詳しく承はり之

活 基 督

を記さ録したのであらうと推測ことが出来る、そふ云ふ譯でルカが最もよく幼年のイエスを描いて居る、尤も極く簡短であるかなれども、二〇四十には「其子や、成長して精神強健に智慧みち神の恩寵その上に臨り」と録してある、それから十二歳のときに両親に連れられてエルサレムへ上りになつたことも録してある、本文には「イエス智慧も齡も彌増り神と人とに益愛せられたり」と出て居る、不經の福音書と申す方を調ぶれば三日四日話を續けても盡さない程、御幼少の出來事が録してあるけれども、それは信すべき價値のないものである、然るに此方の福音書には一向録いてないのに、此所に僅かばかりルカの録して居る所は三四日續け様に話をしても盡さない程、澤山録してある、不經の福音書よりも尙價値がある、之に依つて私共はイエス、キリストの御幼少の時代を伺ふことが出來やうかと思ふ。

活 基 督

第一にイエスも私共のやうに成長發達をなされたと言ふのが面白い、或人の考では神が人の肉體を有つて世に降りになつたのだからしてイエスが母親マリヤの懷に抱かれて居らつしやつたときも三十の年に山の上の大説教をなされたときも、十字架上に悲惨の最期をね遂げなされたときも少しも變らない、昨日も今日も萬世の後迄も變らない所の神だからして、別に成長發達はないとなつて居るけれどもルカは確に成長發達をなされたと言ふて居る、生長發達をなされたと言ふとてあれば如何なる感化をね受けになつたかを研究するの必要がある、私は種々研究をして見たが、第一にね受けなされたる感化は母親マリヤのであつたと思ふ、何所の國の歴史を調べて見ても、世が末になればなる程家庭が紊れて居るやうに思はれるが、猶太人の家庭は末になつても頗る清健であつて、今日から考へて見ても學ぶべき節が多

活 基 督

くある、殊に他の國々に比べて見ると女は大に敬はれて居つた、殊更に母親となればなか／＼勢力のあつた者で、其は兩親に孝行をせよと申す教訓が守られて居つたとて分る、其兩親と云ふ中にも母親の子供に及ぼす感化は實に盛んな者で有た、其は今より二千五百年前に録されたと申す箴三十一〇十一以下を開いてお讀みになると、成程何うも猶太の女は斯くの如き立派な者であつたかとお感じなさることが出來やうと思ふ、其中の二三を讀んで見るならば、誰か賢き女を見出すとを得ん、その價は眞珠よりも貴しとある、此邊を讀み去り讀み來らば、第一に猶太の母親は忠實なる性質を有つて居つた、次は朝は星を戴いて起き、夜は遅くまで臥床に就かずして、奈何にも能く絲を紡ぎ、奈何にも能く機を織つて働いたと申すのである、はや寒くなつてからバタ／＼と衣類の準備をすると云ふのではなく、未だ暑い間からして、冬の準備を

活 基 督

すると云ふやうに先見の明を有つて居つた、さうして下女下男に至るまで能く之れを支配すると云ふのである。慈悲深くあり、敏捷であり、尚ほ智慧に富み、而して卑屈でなく、母親は母親として、妻は妻として、自重して居つたと申すことが明瞭に示されてある。此のマリヤの如きは天主教會に於いては罪のなき神聖なる方として拜まれるが、是れは天主の迷信であるけれども、私共はマリヤの徳の高かつたこと、マリヤが猶太の母親としては、實に立派な模範であつたと申すことだけは許さなければなるまいと思ふ。此のマリヤの感化の下に育つたのはイエスキリストのみではない、イエスの従兄であつたか、將又イエスの兄弟であつたか、其事に就いては議論もあるかなれども、兎も角イエスと共にマリヤの家に育つた者はヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンと云ふ四人の人物であつた。其中でもヤコブはイエスキリストの死後、エルサレムの監督

活 基 督

となつて、猶太の信者の間には非常な勢力を有つて居つたので、新約全書中の雅各書が残つて居る。ユダと云ふのは其の兄弟であつて、是れは猶太の書が残つて居る。ヤコブと云ふ人物は、奈何にも嚴格の性質であつたと云ふ、而してユダは何うであつたかと尋ねて見れば、兄さん程にはなかつたけれども、悪を憎むとか不義を嫌ふとか云ふ點に於いては、頗る嚴かな人物であつたことは猶太書を見ても明かに分る。して見ると此のマリヤの家庭は猶太の律法をよく守り、神を敬ひ、又人に對しての道を盡すと云ふことに於いては、頗る嚴肅なるものであつたことは明白である。イエスキリストも一方から伺ひ奉るときには、奈何にも愛の深い全身悉く愛に満ちた方であつたかなれども、エルサレムの殿に上り鞭を振り上げて、鴿を商ふ者、兎銀をする者を逐ひ出しになるとか、パリサイ人や學者や偽善者に對つては、口を極めて其の偽善を責め

活 基 督

なされた所などを見ると、奈何にも猶太人の重んじて居つた律法の感化をね受けになり、義を守り、不義を責むると云ふ點はなかく強くあられたやうに思はれる。是れは全く猶太人としての母親マリヤの感化に基くのではあるまいかと思ふ。

第二にね受けになつたのは聖書の感化である。猶太國に於いては家庭の中で母親が能く聖書を教へ込んだ傍らに、村には庠序學校なるものがあつて、其の學校のことを庭園と名附けて居る。其の意味は極く廣々したる屋敷の中に小さな校舎があつて、其の學生が放課時には外へ出て遊び戯むれて居るが、愈々正課時間が來たと云ふときには、先生の前に跪いて、其教を受けたので、今日の幼稚園の如く遊び半分に學んであつたらうと思ふ。イエス、キリストも多分庠序學校へね通ひになつたであらう。勿論ガマリエルと云ふやうな大學者の足許に於いて教育

活 基 督

をね受けになつたことはないであらう。此の庠序學校に於いて何を教へるか、と云へば、矢張り舊約聖書の律法を教へる。また村の會堂にても土曜日毎に禮拜があり、其ときにはモーセの五經を三年に一回は必ず朗讀すると云ふことになつて居つた。アンテオケエペヘニスが猶太を攻め取つたときに、猶太人の律法を研究することを禁じたのであるから、其頃は律法の代りに預言書を朗讀することになつて居つた。故に一方に於いてはモーセの律法を朗讀し、他方に於いては預言書を朗讀して聽かせるのであるから、イエスの新たな鮮明なる頭腦の中には、其の舊約聖書の律法の言葉と預言の言葉が充分に染み込み、随がつてイエスは何人よりも優つて舊約全書に精通なされてあつた。舊約の律法なり、豫言なりを教へたばかりではなく、猶太國には種々の諺があつた。御承知の如く英國人は眞實を云へ、唯眞實を云ふ眞實の外には何

活 基 督

にをも云なと云ふことが教育の基礎となつて居るからして決して虚言を吐かない性質の國民を造り出すことが出来た。佛蘭西人は目的さへ宜ければ方法は選ばないと云ふ教を興へたが爲に虚言吐きの國民に零落したのである。それならば猶太人はどんなな諺を子供に教へ込んだかと申せば「羊は他の羊に従ふ」是れは殆んど無意味のやうであるけれども、一匹走れば皆走ると云ふ我國の諺に類したものであらう。友なき人は右の手のなき左の手に同じ「道に耳あり壁に耳あり」又「老いて後に智慧を求むるは水に字を描くが如し若き時に智慧を求むるは石に字を刻むが如し」何うも面白い水の上に何程字を記しても消えてしまふ、若き時に學ぶのは石に字を彫り込んだやうで何うしても拭ひ消すことが出来ない」と云ふのである。「忍耐と争ひに於ける沈黙は高貴なる心の印なり」人が喧嘩でも仕掛けて來たときに黙つて居るのは貴き

活 基 督

心の印だと云ふのである。「説話は銀の價値あり沈黙の價値は之れに倍す」斯う云ふやうな諺をヨセフなりマリヤなりから聴になりそれがイエス、キリストの御性質を形成する上に大變な力となつてあらう。私は尙其のイエスのね受けなされたる感化に就いて、殊に聖書の感化に就いて考へて居ることは、當時猶太國には「パリサイ」宗があり「サドカイ」宗があり「エッセネ」と云ふ宗旨があつて、舊約の解釋に就いては大に説が岐れて居つたけれども母親のマリヤがイエスに聖書の句を教へるときには「パリサイ」宗、「サドカイ」宗、又は「エッセネ」宗の學説を云はずして「心を盡し精神を盡し力を盡して主なる爾の神を愛すべし」とか又「己の如く爾の隣を愛すべし」とか云ふやうな千古萬古天地は盡きても決して易ることのない聖書の金言をばキリストの意の中へ刻み込んだものであらう。日曜學校や家庭に於いて小供等に聖書を教へや

活 基 督

うとするときに子供の分らないやうな神の心理學的性質とか或はキリストは神人と云ふ兩性を有ちに成つて居たとか或はキリストが奇跡を行ひなされたとか云ふやうな理窟を主として打込んで行くとその子供等は成長後に其の打込まれた奇跡に對しては懐疑心が起つて来る、又分らなかつた神の性質やキリストの性質に親いては疑を生じて来るけれども賢き母親賢き教師は其の小供なり青年なりの心中に舊新兩約書の中に示してある萬世不易の神の聖語をば力を盡して植込むのである、之れを植込んで置くならばそれが他日成長發達の後に至りて其人の品格を形成する基礎となり又敬虔の念を養ふ基礎に成る、それが其人の家を齊め世に處する所の大いなる助けと成るのである、蓋し先きに申上げた神を愛し人を愛すると申すことは勿論であるが或は空飛ぶ鳥を見よとか或は地に這ふ獸類を見よとか或は野の

活 基 督

百合花を見よとか云ふやうな魔はしき天然自然から出て来た所の詞を植込むこともあらう或は又「重きを負る者勞れたる者は我に來れ我爾を慰ません」と云ふことを植込む者もあらう、又或は彼の太二十五の終りの所に示されてある「爾等わが飢し時我に食はせ渴しときに我に飲せ旅せしとき我を宿せ」云々と云ふ彼の尊い聖語を植込んで置くならばそれが即ち社會教育の爲に力を盡すとか或は慈善の爲に力を盡すといふ場合に於いて、其人には社會學や慈善教育が與ふることの出來ない奧妙なる趣味のものを植込むのであるから小さな人に冷かなる水を一杯與ふるのは、キリストが我に與ふるのも同様だと云はれたことを思ひ出せば、何うしても冷淡な心で居ることは出來ない、二枚の着物は一枚分けて遣りたい、二椀の飯は一椀分けて遣りたいと云ふ慈善心が腹の中から湧出して来るようになるであらう、故に聖書教育

活 基 督

の尊い所以は神學の論説とか或は如何はしい議論附のものを教へるのではない、千年経つても萬年経つても議論のなき眞理をば其の先生なり母親なり父親なりが腹の中に味はつて其味はつたものをば子供に推及ぼして行くので是れが最も大切なる事柄であらうかと思ふ。更に進んでイエスキリストの性格を形成する上に必要なものは、キリストの四邊の社會であつた此の社會と云ふうちには第一にイエスキリストの家庭の状態を思はなければならぬ父親のヨセフは大工であつたがマリヤとならば大方齡が三十も四十も違つて居つたかも知れない爺さんのヨセフに十八九のマリヤが嫁いたのである、それでイエスの十二歳のときには両親が伴れてエルサレムの殿に上つたと云ふ記事があるかなれども其後はヨセフの名が見ぬない、多分死んだであらう、六十四五で死だとしてもイエスキリストは五十餘の齡の子であ

活 基 督

るから長く其の父親の膝下に在つて感化をね受けなされることが出來なかつた其の父親のヨセフの死後は母のマリヤとヤコブ、ヨセ、ユダシモンと云ふ四人の男の子を誰が支へて行たであらうか、まさしくイエスが勞働をなし即ち大工の働をして之を支へたまふたであらう、諸君、青年イエスが貧乏なる世帯を雙肩に擔ふて起たれたことを想像して御覽なさい、或時は麵麩を買ふ金のなかつたこともあつたであらう、或時はガラヤの湖水から魚を獲つて來て副食に御供へになつたこともあろう、兎も角貧乏の中に母親を慰さめ又四人の青年を治めたまふたからして頗る困難な場合にね立ちなされたこともあつたであらう、併しながら此の大工の仕事をなされたと云ふこと、貧乏とね職ひなされたと云ふこと、は私共の救世主として之れを仰ぎ、又救世主として之を頼に足るべき深き同情をね養ひなされた殊に貧乏人の状態

活 基 督

に明るく居らつしやつたのだからして之に對して盡きせぬ同情心を
 れもちになつたと思ふ、それで希伯來書の記者は「我儕の軟弱きを思ひ
 遣ること能はざる祭司の長は我儕にあらざ」と録して居る實にイエス
 キリストが我儕の間に降り貧乏の中に艱難辛苦を嘗なされたので
 キリストたるの價値が一層現はれたのであるかと思ふ、さうしてナザ
 レの社會と申すのは大道の片側に立てられた村であつて、至つて人氣
 が悪く「ナザレより何の善き者出てんや」と申す諺もあるくらゐであつ
 た、其汚れたる人々の集まれる中に、イエス、キリストは人情の學問をな
 されたのであるからして、人々が金子を愛するとか、金子の爲ならば親
 類縁者をも踏み倒して行くと云ふやうな、そんな人情の酷たらしい有
 様に就いては自から之れを御實見になり、さうして御説教をなされた
 のであるから、説教はヒシ／＼と盡に當り、胸部を釘で打たるゝやうに

活 基 督

感じたのである、此の社會はイエス、キリストに純良なる感化を與へな
 かつた唯社會の暗黒なる半面を現はしたのであつて、イエス、キリスト
 は其の眞暗黒の中に一の光明としてお立ちになつたのであるから、其
 汚れたる感化を受けずして禍を轉じて福と爲し、暗黒を轉じて光明と
 爲すと云ふ譯で、良い感化を取り、さうして之れを社會の人々に又返し
 て遣はしになつたと申しても差支はない。
 終りに天然自然の感化を考へなければならぬ「四方の景色は麗かなれ
 ど、たゞ人のみ惡に染れり」と云ふ一句は、ナザレの邑と詠じたものでは
 ないか、然し其實狀は此一句が云ひ表して居る實に其の民草は汚れ腐
 れて居るが、ナザレの天地は神のれ遣りなされたる儘に存じて在つた
 ことを思はなければならぬ、此のナザレ邑と申すのは南の方にはエス
 ドレリアンと云ふ廣漠なる平原があり、北の方にもエルドルフと云ふ

活 基 督

麗はしき平原がある、此二平原の間に海面から千二百呎ばかり高き所に立つたのがナザレ邑で、其邑の四邊は尙五百呎の高い小丘が取捲いて居ると云ふのだから、小丘の頂上は海面から凡そ千七百呎くらゐの高さである、此の邊の土地は石灰質で眞白になつて居所もあり、又は其の巖の所は少しく黒味掛つて居ると云ふやうな有様で尋常から云へば支那の山のやうに極く兀げた景色のない山である、けれども春の彌生の花咲く頃となれば、此の山々の巖の間には牡丹の花が咲き亂れて居り、巖間には純白の百合花の花が媚を呈して居る、而して其山と山との間から見ると、南北兩平原ににける作物の翠と相映じ、其の景色は何とも云へない麗はしきものであると云ふ、夫れからナザレ邑の四邊を取捲く小丘に登つて東の方を眺むれば、一方にはテールボル山が見ゆる、其の山の向方には四時白雪を冠れるヘルモン山が聳ゆる、南の方へ眼を

活 基 督

轉ずれば、エスドレリアンの平原の向方にはサマリヤの山々が手に取るが如くに麗はしく見ゆる、西の方へ眼を轉ずれば、カルメル山の山脈は殆ど大阪から六甲山脈を見るが如くに聳ゆる、しかもナザレ邑は山と山との間に築き建てられたる邑であるから、非常に空氣が清潔にして、所謂山間の清風と云ふ眞に心持の宜い風がソヨクと吹いて居る、其の自然が今日と雖もナザレ邑に遊ぶ人をして實に他の所と異つた光景を目撃せしむるので、ナザレ邑の女や子供達の眼は、山の翠と山々から吹き来る新鮮なる風の爲に何とも云へない涼しき状態を現はして居ると云ふのである、殊に青年が或時は山に登り、或時は巖間に下り、天地自然の美妙に接觸すると云ふことに依つては、自から想像力が明かになつて来るし、智慧が聰とくなつて来る、尙又秀麗なる山と河との感化は高貴なる性格を造り出すことが出来る、と云ふのである、イエ

活 基 督

ス、キリストが未だ幼くして此のナザレの邑の巷を歩きなされると
 きには、四邊に在る腐れた人間を見て其の感化をね受けなされるより
 も、邑を取捲く所の山々の感化がキリストに及んで来たであらうし或
 は其の小山の上にな佇ちなされて、四方の大なる天地を御覽なされた
 るときには、其の天地が與ふる所の美の感化と其の天地の奥に在ます
 所の天の父の偉大なる感化とがキリストの聖意の上に及んで来て、さ
 うしてイエス、キリストの性格を形成るに就いては、非常なる効力を及
 ぼしたものではあるまいかと思ふ、田園生活が健全なる感化を青年の
 上に及ぼすことは、昔の人も今の人も實驗して能く辨へて居ること
 あるが、殊更にナザレ邑が天然の感化をキリストに及ぼしたと云ふ點
 に於いては、神が之れを撰んで、此所にイエス、キリストを成長なさしめ
 られたる譯であらうかと思ふ。

活 基 督

第四章 基督の姿

凡て我儼帕子なくして鏡に照すが如く主の榮を見榮に榮いや増
 りて其れなじ像に化る也これ主すなはち靈に由てなり(哥後三〇
 十八)

何人に限らず深く己れが敬ひ慕ふ所の人物があれば其の寫眞を座右
 に掲げ朝に夕に之れに向つて欽慕の意を表するは人常の常である紀
 元三百三十年の頃コンスタンチン大帝の妹コンスタンシヨスは深く
 主イエスを慕ふの餘り、パレスチナの何所かにキリストの御肖像があ
 りさうなもの、若しあらば捜し出して座右に掲げたいものだと思ひ其
 の考を述べた所がイウシピオスに叱られたと云ふ話がある、人情は昔
 も今も變りはない矢張りイエスの聖姿が見たい、口碑に據ればルカは

活 基 督

醫者であつて傍ら書を能しイエスの御肖像を書いたと云ふが今世に傳はつて居らない希臘教では聖書と稱へ天主教では聖像と云つてキリストの肖像を拜して居が此の聖畫聖像を造るには何か根據があるかと調べて見たが何うも確かなる根據がないと見ゆる多分何れも想像のもので眞物のキリストに似て居るや否や誰も判断する譯には行かない。

此頃讀んだ雜誌に猫の畫を描くのは甚だ難しいもので此の世界でその名人は唯た四人しかないと録されてあつたから何う云ふ譯合であらうかと思つて其の理由を尋ねて見ると道理らしいことがある猫は外面は軟かなる毛を以て蔽はれて居るかなれども其の内部には硬くて逞しい筋骨があるから軟かに描けば硬い所が現はれず硬く描けば軟かなる所が現はれぬと云ふ此の筆録を以て推すときには人物畫を

活 基 督

描くにしてもたゞ強い一方の人であれば餘程描き宜からうまた柔和の一方の人であればこれも極めて描き易からうと思ふが多方面の人物は畫工も餘程困窮するであらうかと思ふ主イエスの聖姿を描くには古來如何なる名家と雖も非常に苦心をいたしたさうである其の名家として第一に算ふべき畫工は御承知のラファエルであるが彼は嬰兒イエスが母のマリアに抱かれて居らつしやる所を幾十種も描いて居るそれは今日歐羅巴の彼方此方の美術館に掲げてあるまたイエスが葬式にお會ひなされる所の聖姿とか十字架から取り下して棺に納むる所を描いたのもあるまたキリストの變容と申して高山の絶頂にて聖姿が變らせられた其の雪よりも白く輝ける聖姿を描いたものもある去りながらキリストの御肖像として描いたものはないミケルアングローは彫刻家であつたが彼れの描いた物が一ツあるそれは倫敦

活 基 督

のナシヨナル、ガロリーと云ふ美術館に存して居る、これも二三の人々がイエスの御屍を棺に取り納めやうと云ふ所を描いたのである。私は未だ曾て單純なキリストの御肖像を見たことがない。或は御屍を取り納むる所とか、或は聖姿が變らせらるゝ所とか、或は祈禱に精神をお凝しになつて居ると云ふ、其の一方面にイエスの御精神が注がれてある所を描すことは容易いけれども、イエス、キリストが何氣なく其所に默然として在らせられる、其の御肖像を描くことは實に難いであつたらうと思ふ。

今其の描き難い理由を考へて見たが、第一、イエスが僅か三十を一ツか二ツお越ゑなされたときに、當時の人々は五十ぐらゐに成らせられたとお見上げ申したと云ふのであるから、若盛りのイエスは甚だ老熟の情態で在らせられたから、若々しい所へ老熟の相を描かねばならぬ、餘

活 基 督

り老て見ぬるやうに描けば、イエスの若々しい所がなくなり、お若い姿に描けば、老熟の相が缺けるから、其真相を描くことは困難であつたらう。

第二、太十二、十九、二十に「彼は競ことなく喧ことなし、人街に於て其聲を聞ことなし、審判をして勝とげしむるまでは、傷る葦を折ことなく、煙れる麻を熄ことなし」とあるを以て見れば、誠に從容に、柔和に、其のお話聲も街に聞えなかつたと云ふが如く、極めて温順なる聖姿で在らせられたのである。さうかと思ふと、エルサレムの殿へお登りなされたときには、鞭を擧げて、飽を商ふ者、死銀をする者を殿より叩き出して、おしまひなされた。或はパリサイ人、學者、偽善者に對しては、ア、禍なるかな、學者とパリサイ人よと云つて、責めなされた。このときには、實に猛虎一聲、山月高しと云ふ氣概が現はれて、如何にも處女の如き中にも、天地

活 基 督

を叱咤なさると云ふ氣概を含んで在らせられたから之れを描き出すことは極めて困難であつたらうかと思ふ。

第三、大工の服をね召しなされて罪人や税吏の仲間へね這入りになり、偕に飲んだり喰つたりして少しも世の中の俗人と異らせらるゝ所がないので、一見尋常の大工さんと申すやうな御風采であつた、去りながら太十七〇の初めに録される如く其の御面は輝き、その御衣は雪よりも白しと云ふ極めて高潔なる聖姿が存じて居るから俗人の貌に仙人のやうな高潔なる聖相を描き出さなければならぬから、これも餘程難しかつたらうと思ふ。

第四、手桶に水を汲んでね使徒方の土足を洗ふとあるから、一見下僕のやうになつて在らせられたのである、けれども其中には萬物を己れに従はし得べき神力を備へて在らせられたのである、故に他人の土足を

活 基 督

洗ふ下僕の貌に天地萬物を従はし得る神力を備へた人格を描き出すと云ふことは極めて困難であつたらうかと思ふ、して見ればラファエルもミカエルアングロも古今の名家がキリストの御肖像を描くことをしなかつたのは、それは描きたかつたであらうが、その實は描き能はずの方であつたらうかと考へる。

そこでもう御肖像と云ふものには望がないから、此度は詩なり文なり所謂文筆を以つて描き出されたるキリストの聖姿に移つて見やうと思ふが、これも後の人の録いたのは當にならない、矢張りキリストに親炙して親しくね顔を見親しくね手に觸れて居つた人の描き出したものが確かであらうと考へる、けれどもイエスの又弟子ぐらゐは其中に入れて研究をしても宜からう、第一にイエスの又弟子のマコは何う云ふやうにキリストを描いて居るか、彼は權勢を慕ふ羅馬國民にイエス

活 基 督

を示さうと思つたので、王公又は征服者として描いたものである。蓋し馬可傳を讀んで見ると其のイエスの威光なり、高德なり、人々を壓するやうな威勢を示した點が多い。可十の十七に「イエス途に出けるに一人はしり來りて跪き問けるは」とあるが、此の跪きと云ふ字に御注意を願ひたい。太の引證の所を見ると、たゞ或人來りて彼れに曰けるはと録いてある。路加傳の方には或司問うて曰けるはと録いてあるが、跪いてと云ふ字はない。マコだけは一人走り來りて跪き問ひけるはと、殊更に跪きと書いたのは、矢張りイエスは王公又は征服者と仰ぐ所から來たものである。又同じく可九〇十五を見ると、衆人たゞちに彼を見て、眩き趨よりて禮をなせり」とある。馬太傳、路加傳の方には禮をなせりと云ふ文字がない。これはマコだけが使つて居る。マコが此の傳を録いたときは、其の心の中にはイエスは王公だ、征服者だと思つて筆を執つたもの

活 基 督

であるから、其の筆の走り、工合で跪きとか禮をなせりとか云ふ即ち主イエスの前には何人も來りて頭を下げたと云ふことを描き出して居る。それから又弟子のルカは何うであらうか、路加傳の方にはイエスを完全なる人物として描き出したやうに思はれる。ルカが讀ませたいと思ふた希臘人民は人物崇拜者であつて、完全なる人間、美麗なる人間、高德な人間など、云ふ完備したる人物の摸型を造つて之れを賞讃した人物であるから、其の希臘人にイエスを紹介するには、何でも完全なる人物として示さなければならぬ。それを路加傳を開いて讀むならば、イエスは斯う云ふやうにして生れになり、智慧も、船も、彌増り神と人に愛せられたと録してある。尙進んで全部を讀んで見ると、完全なる人間としてのイエスの御肖像は、歴々として現はれてあるので、路加傳にては此點に付て深く味ひたいと思ふ。

活 基 督

今申上げたマコとルカはイエスの又弟子であるが、此度はイエスの傳道（伝道）の始めから十字架（十字架）上に殺されたまふた日まで、親しく影の形（影の形）に添ふが如く之れに附添（附添）ひ申して居つたと云ふ。マタイは何う云ふやうに描いて居るか、彼は何でも猶太人にイエスを紹介しなければならぬと云ふことを深く考へたので、馬太傳（馬太傳）に現はれて居る主イエスはエリヤのやうな預言者であつたと云ふ。實に面白い譬へば、山上の垂訓（山上の垂訓）を讀んで見ても、昔の人は斯く示したが、我は爾曹（爾曹）に斯く示すと云つてお話になつたと録してある。即ちマタイの頭腦の中には、昔の預言者と云ふものが深く描かれてあつたから、キリスト、イエスの聖話は昔の預言者と對比して録した節が多い。譬へば心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべし、亦己れの如く爾の隣を愛すべし」と云ふ。イエスの聖話を擧げ來つて、昔の律法と預言は皆此の中に含まれて

活 基 督

居ると示して居る、それから先きに申上げたア、禍（禍）なるかな學者よ、バ（バ）リサイ人よと云つて、聖話をなされる所などは彼のエリヤやエリミヤの如き精神を以て正義公道を唱へなされたる情態を描いたものである。なほ進んでキリストの御高弟と仰がれたペテロは如何にキリストを描いて居るか、と云へば、彼前二〇二十二に「かれ罪を犯さず又その口に詭譎（詭譎）なかりき」とあるが、實に何ともない語である、これは消極的の方からイエス、キリストを見て云つたのであるが、若しも之れを文人畫（文人畫）に描いたならば、唯た二筆でと云ふ所である、私は此の語を讀んでこれは實に神筆だと思つた。實に、イエス、キリストは空前絶後の大人物である、開闢（開闢）以來斯くの如き人物はなかつたが、また未來永劫、彼が如き人物は此の世の中へ出現することはあるまい、其點を一言に描き出さうとすると

第六十八
第四章 基督の姿
きには、他に何も云ひ様がない彼れは罪を犯さなかつたと云へば充分である。釋迦も孔子もソクラテスも、どんな聖人が出ても、どんな賢者が出て、もみな罪を犯して居る。ソクラテスは希臘の聖人であつたが、鶏姦を行ふたと云ふ穢がある。孔子は方便を用ゐる。釋迦は放蕩三昧に身を持册した事がある。ので、みな多少の罪跡がある。されども、マザレのイエスは、キリストの御生涯は、玲瓏玉の如く、一點の瑕、一點の汚點もない。其イエス、キリストを描くの、に罪を犯さずと云つた一言は、ペテロが眞に神筆を揮ふて、キリストを描き出したものとして、感佩せざるを得ない。又「その口に詭譎なかりき」と云ふのは、何でもない言葉のやうであるが、どれも千萬金の重みを有して居る。何となれば、どんな聖人でも、どんな賢者でも、方便を使ひ、多少の術策を用ゐた跡も見出さるゝに、主イエス、キリストは初めから終りまで「その口に詭譎がなかつた」と云ふ、これは

キリストが何所までも眞實を以てお突き通しなされた状態を消極的に言現はしたものである。
更に進んでキリストから此上なき御寵愛を受け、たね弟子のヨハネがイエスを描出して居る状態を見ると、私はペテロに比べて一日の長ありと思ふ。何となれば、後者は消極的に描き出したのを前者は積極的に描き出して居る。約一〇十四に曰く「それ道肉體と成て我儕の間に寄り我儕その榮を見るに、實に父の生たまへる獅子の榮にして、恩寵と眞理にて充り」と、これより高い描出法があらうか、父の生みたまへる獅子と云ふときには、此の天地を造りになり、無限無量の愛を湛へて在らせられる、天父の獨子と云ふのであるから、天の父の裏にあつた無限無量の愛が、イエス、キリストの裏に藏められてある。天父の有せられた徳性は、彼の裏に具備たと云ふ意味を含んで居る。其のイエス、キリストの聖

活 基 督

姿を拜するに恩寵と眞理にて充てりとある此の眞理と云ふ意味は天地の眞理即ち心靈上道徳上に存する所の眞理がイエスキリストの腹の裏に藏めてあると云ふ意味を其所に現はしたのである。

茲にヨハネが恩寵と眞理と云つた其眞理の中には道徳上の眞理が満ち溢れて居るが故に、假令キリストを拷問しやうが十字架に針かけやうが其首を引拔ふが、彼は道徳上の眞理の化身であるから、其裏に備はつた所のものは圓滿完全にして少しも缺點がない恰も玉を砕いたやうに其碎粉に至るまで悉く玉であつて、其の中に少しも瓦礫はない所謂眞實眞理と云ふものが含まれてあることを意味して居る。

又其の恩寵と云へば幼兒を伴れて來れば、之に向つてキリストの愛が溢れる、癩病患者を伴れて來れば、又之に向つて其の愛が注がれる、またキリストが十字架上の四苦八苦の苦惱のとき母のマリアがヨハネと

活 基 督

偕に參れば此なんぢの子なり、此なんぢの母なりと云つて其孝心が溢れる、恰も太陽が光線を放つが如く、四方に其の恩寵が發射する有様を描いたのである、平く云へばキリストには嚴とした骨がある、其の骨は實に福々したる麗はしき肉を以て包まれてあるやうな譯で實に眞理と恩寵が満ちて居る所を顯はして居る、總て物は比較であつて他の物に比較して見なければ分らぬ、何うてせう、彼の大石良雄と云ふ人物を見たときには、彼れは我主君の爲に仇を報じなければならぬと云ふ義烈の精神は貫徹して居るかなれども、彼に翠綠滴るが如き愛とか恩寵とか云ふものを見ることが出来やうか、又爰に我子の病氣に就いては、帶をも解かずして晝夜介抱をして居る慈母を描き出さうとするとき、に其の慈母の裏には千古萬古易らざる愛心は満れども、烈火の如き精神は現はれて居らぬ、此の二者を兼備へて世に降りたまふたのがキリ

ストである。

マタイなり、ペテロなり、ヨハネなりは、三年の間日々夜々キリストに
交はり申して其の見た所其の感じた所を録いたのであるから、これは
真に迫つて居ると申しても宜からう。

今一人キリストの御存命中に一寸ぐらゐは聖姿を見たかも知れない
が、側面に在つて教訓を受けたことのない、寧ろキリストに反對をし、又
其れ弟子に反對をした所謂キリストに對しては敵愾心を有つて居つ
たが後にはお弟子になつたと云ふパウロが如何にキリストを描いて
居るかを見たい、哥後四〇四に「是神の像なるキリストの榮の福音の光
をして彼等を照さざらしめんが爲なり」キリスト、イエスは神の像と録
いてある、又其の第六節に「光に命じて暗より照出しめたる神我儕をし
てイエス、キリストの面にある神の榮光を知る光を顯さしめん爲に我

活 基 將

活

基

將

儕の心を照し給へり」とあり、更に西一〇十五には「彼は人の見ことを得
ざる神の状」とある、即ちペテロが録くときには、彼れは罪を犯さない、其
の口には少しも詭譎がなかつたと云ひ、ヨハネが録くときには、父の生
たまへる獅子であつて、恩寵と眞理にて充りと云ひ、キリストを見たこ
とのないパウロが録くときには、神の像なるキリスト、彼れは人の見る
ことの出来ない神の像と云つて居るが、これは非常に高尚である、非常
に深遠である、併しながら何うも見たことのない悲しさには、此所に極
めて奥深い、極めて高尚なる筆を以てキリストを描かうと思つたとき
に、何うも録き様がないから、神の像なるキリスト、人の見ることの出来
ない神の姿がキリストに顯はれたと云ふ、雲烟漠々の間に非常に高尚
なるものがあると申したのである、これは何か深い高い點があるやう
であるが、私共は目を閉り、パウロの云ふやうに人の見ることの出来な

活 基 督

い神の姿と云ふことを考へて見ると何うもこれではキリストの姿が現はれないヨハネやペテロやまたマタイのやうに云つても現はれる、見たことのないパウロが云つたことは何うも寫らぬやうに思ふ。そこで使徒方が力を竭して茲に主イエスの聖像を筆にて描き出したのであるから私共は之れを綜合してさてイエスは如何なる御方であつたらうかと我心の中に主イエスの聖姿を描出すことが大切である私が今之れを描いて諸君に眼目に懸けたならばそれは私の描いたキリストになるのであるから寧ろ之れを描かずして其の材料を諸君の前に供へたのである故に諸君は之に基いて各自キリストイエスを描き出し朝に夕に其の聖姿を諸君の座右に掲げらるゝことが必要である今日の日本の書工などに到底キリストを描き出すやうな人物は居らない又今日の文學者も亦然り到底實際のキリストを描き得るも

活 基 督

のではない、個々之を描かうとするならば書工でも文學者でも私が此所に述べただけの材料を取り之れに基いて描くの外はないのであるところが諸君や私共は書工でもなければ文學者でもないから何う云ふやうに描いたら宜からうか併し其の描出法は書工にも優り文學者にも優る方法があらうと思ふそれは「我儕帕子なくして鏡に照すが如く主の榮を見榮に榮いや増りて其れなじ像に化る也」とあるからイエスキリストの聖姿を常に心の中に掲げて朝に夕に之れに對ひ、ア、キリストは其の御聲が街に聞えなかつたと云ふほどの優しいれ方であると同時に不義奸悪を憎みたまふときには實に嚴とした雷のやうな勢をね現はしになつたと云ふことを考へ或はキリストが他人の足を洗ふ所の下僕のやうであるかと思ふと高き山の絶頂に於いては其の聖姿が變つて神の如く輝きなされたと云ふやうな所を考へ私共が他

人の草鞋を取るやうなことがあつても、其の心の中には神のやうな潔き所がなければならぬ。假令身には厚司を着て居つても、其の心の中には實に聖人のやうな所がなければならぬと云ふやうに、だんく其點を考へて行つてキリストのやうな心を以て通したならば、自然にキリストのやうな語を話すことが出来るやうになり、またキリストのやうな正しき行狀を爲すことも出来るやうになる。即ち一心不亂にキリストの聖姿に對して我心を磨いて行くなれば、それは實に聖靈の力に據ると録いてあるが、幸福なることには私共の顔貌がだんくとキリストの顔貌に似て来る、また私共の風采がだんくとキリストの御風采に化つて来て、草鞋を取つて居つても、厚司を着て居つても、人々が其の前に來りて頭を下げ、大いに尊敬しなければならぬやうな人格を描き出すことが出来る、これは尤も大切なることである。私共は信仰があ

活 基 督

つて思想が高尙で、さうして品格が高いと云ふときには、自然と其の風采まで上つて来る、けれども若しも一度墮落したと云ふときには、二度と見られぬやうな狀に落ちて来る、どうぞ鏡に照すが如く、榮に榮むいや増りて、其れなじ像に化る也とある、其のキリストに倣うて、我日本に於いて、畫工も文學者も描き出すことの出来ないキリストを描き出し、以て其の眞理を發揮したいものである。

第五章 基督の教訓

下吏こたへて曰けるは、未だ斯人の如く言し人あらず。約七〇四

六

構廡の節のときに、天下の諸國から多くの人々がエルサレムに集まり來り、而してエルサレムの宮は其中心點であつて、其所に學者も無學者

活 基 督

活 基 督

も悉く集まつて居つたイエス、キリストは其真中に立つて大説教をなされた。パリサイ宗の人々はキリストの人望が日に月に増し加はるのを見て、もう何うしても手を下して之れを捕へなければ、奈何に成行かかと云ふ杞憂があつたからして、多勢の人々の中に潜かに其下吏を送り込んだ。ソコ彼輩は鵜の目鷹の目でイエスを睨み、少しでも隙があつたならば打込んで捕へやうと思つて居つた。然るにイエスの御説教が段々進んで佳境に入るに従ひ、何時の間にか興に入り、到頭使命を果すことが出来ずして、首領のところへ還つて来て未だ曾て彼のお方のやうに説教をする人は見ないと云へば、パリサイ人は火の如くに怒り、下吏など云ふ奴は捉を知らないから無益だと云つて歎息をした。其實は、パリサイ人や有司のやうな連中は、胸に一物あるから、イエスの聖語を聴いても空吹く風と受流したのであるが、此の下吏共は別に豫想

活 基 督

臆断がないから、イエスの聖語を親しく承はつたときには感じまいと思つても感ぜずしては居られない。遂に意を奪はれてしまつたのである。是によつて奈何にイエスのお教に權威があつたかと云ふことが分る。

扱て基督教界に於いてはイエスの贖と云ふ教理が多くの人々に否凡ての人々に深く信仰されたからして、未だ曾て此の人のやうに話したことがないと云ふ、其尊い御教訓も贖の教に比べて見れば、横の方へ押し遣られたと云ふ姿であつた。ところが是れも十九世紀の半になつて、大いに學者の研究する所となり、益々御教訓の權威あり、價値あることが現はれ來たつて、遂に獨逸のハイデルベルヒ大學の教授ウエントが「イエスの教訓と云ふ大著述を出すことになつた。其他新約全書神學と云ふ書物が彼方此方に現はれたのである。日本譯にはホルドン著、イエ

「ス」の教訓が出版になつて居る露西亞に於いては文豪トリストイが其著書我宗教に、山の上の説教に就いて論じて居るが此の書物は露西亞を始め歐米諸國の多くの人々の意を動かしたやうに思はるゝ兎に角十九世紀の半より以後は益々深くキリストの御教訓を味ふことになつたのである。

さてキリストの御教訓は何に基いて居るか唯キリストの腹の中から水の湧くやうに湧いて來たものであるか但しは何かキリストがね學びになつたのであるか是れは大いに研究すべき價値があるサンデー曰く「キリストの教訓は舊約全書の根本真理即ち其の粹を取つたものである先づ其の粹を極めて而して之れを敷衍し其の潔められたる滴瀝が結晶體と成つたのだ」と或學者は四福音書を讀んでイエス、キリストが舊約全書に精通在らせられたことに驚いた何うして彼の通りに

活 基 督

活 基 督

舊約書を深くね究めに成つたものか昔は印刷がないから舊約書は羔皮に記録されたものであつてエルサレムの宮とか或は町や村の會堂には一卷ぐらゐるは備へ附けてあつたかも知れないがナザレの大工ヨセフのやうな貧乏人の家には無論之を備へ置く譯には行かないして見ればイエス、キリストはナザレ村の會堂に安息日毎に御出席になり學者が朗讀する所の聖語をね聴きなされて之れを腹の中に記憶せられたであらう或は又母親のマリヤがイエスを膝の上になら抱き申して居るときから詩篇を誦ふたり或は箴言を讀んだりするのを聴き又舊約史の説話をする度毎に耳をね傾けになつたのであらう。全體幼いときに父母が話して呉れたことは幾歳になつても忘れることは出來ない桃太郎の話でも舌切雀の話でも私共の意の中に能く記憶して居る故に親たる方は舊新兩約書に御精通になり其の説話をば

活 基 督

際の上や、我四邊に在る子供達に聴かせなされたならば、非常な感化を興へるであらうと思ふ。キリストは右に話申すが如く、此の舊約の三十九卷は悉く腹の中に入れて在らつしやつたと申しても、差支はない。そして世の中に出て、救主としての動作をして、御説教をなさる場合には、内に満ちて居るものが潔められ、高められ、大きくせられて、キリストの玉の唇から迸り出たのであるからして、其聖語は悉く金玉と成つて現はれたのである。私共が舊約の中で讀むときには、左程に思はなかつた聖語でも、イエス、キリストの御口を通して出て来たときには、斯う云ふ真理、斯う云ふ教訓が舊約の中に在つたらうかと思つて驚く程である。例を擧げて申せば、約十三〇に「われ新誠を爾曹に予ふ即ち爾曹相愛すべし」との是なり」と録いてある。舊約聖書の申命記を開いて讀むときは、左程にも思はないが、キリスト、イエスが「爾心を盡し精神を

活 基 督

盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべし、これ第一にして大なる誠なり。第二も亦これに同じ己の如く爾の隣を愛すべし、凡ての法律と預言は皆此二の誠に因れり」と太廿二〇卅七—四十、仰せられたときには、天地あつて以來今日に至るまで、斯くの如き大いなる真理を説明した者はないと唱へられてあるけれども、是れは申命記申六〇五を敷衍してキリストが教へになつた譯である。或は又使徒方がキリストに祈禱を教へて貰ひたいと云つたときに「天に在ます我儕の父よと祈れ」と仰しやつた、其の父と云ふ聖語はキリストが初めなされたかと尋ねて見ると、詩篇や、以賽亞書にあるけれども、舊約の中で詩人が父と呼び預言者が父と叫んだのと、イエス、キリストが天に在ます我儕の父よと仰せになつたのとは、其文字は同じことであるが、其の意味は全然異なつて居りはしないかと思ふ程に、非常に温かなる味ひが其所に含まれて居

る是れは舊約から引出して新たに傳へになつたのである、而して其
 大いなる教を説明なさるに當つては抽象的に話になつたことは殆
 どない、悉く具體的である言を換へて云へば六ツかしい哲學的の説明
 でなくて、ごく容易い譬喩を取つて話になつた(甲)天然物から譬喩を
 ね引きになつた其例を申すならば種蒔きの譬喩、空の鳥野の百合の花
 痛める葦、葡萄の樹、真珠の話をなどであり(乙)ユダヤ人民はキリスト以前
 も其當時も其以後も同じことである、非常に商賣に鋭い國民であつた
 故にキリストは眼の中に指を突き込むやうな適切なる比喩をね引き
 になつたのは彼等の生活上より出たのであつた、其二三を舉れば「爾曹
 神と財産に兼仕ふる能はず」日本の士族などは天の神と金を天秤に懸
 けて何方が重いかを量らうと云ふやうな考は頭腦の中に起らない、け
 れどもキリストは神と財に兼仕へてはならないと仰しやつた、是れは

活 基 督

活 基 督

實にユダヤ人の心を穿つたものである、否、今日の人間の心を穿つて居
 る、又不義の番頭の比喩がある、不義の財産の話がある、さうして私共が
 各々天より受けたる才能を働かさねばならぬと云ふことに就いては、
 五千の銀三千の銀二千の銀を興へたと録いてある實にキリストは商
 賣人の腸を抉り出したやうに能く其の事情をね知りになつて居つた、
 是れはユダヤ人としての生涯から出て來たことであらう、尙ほ其他に
 例話を多くね使ひになつた、其の例話には短いのと長いのがあつた、短
 のは太十三〇可四〇に出て居る長いのは路加傳に出て居る彼のサマ
 リヤ人の話、放蕩息子の話、貧乏人ラザロの話である、この比喩とか例話
 とか云ふものにてキリストの御説教の多くは成立つて居る。
 是からキリストの教訓の特質を申上げたい

第一 單純なれども幽邃 キリスト、イエスも他の賢哲と等しく簡短

活 基 督

なる句中に深遠なる意味を含有してお話になつて居るが、キリストのはンクラチスや孔子や孟子などに較べて見れば更に深いことを見出すのである。其中の二三を挙げんに、可二〇二十七に「安息日は人の爲に設られたる者にして人は安息日の爲に設られたる者に非ず」如何ですその時分の猶太人は安息日を守らねばならない之が爲には、上の者も下の者も皆奴隸となつて居つた其場合にキリストがれ出になつて安息日に病人を癒したと云つては大反對が起り安息日にキリストが使徒を従れて麥島をお歩行になり、麥の穂を摘んだと云ふことに就いては、大問題が起つて来る。其中に於いて安息日は人間の爲に神がお設けなされたものだ、と道破なされた人は安息日の主人公と云ふ精神で安息日問題を解釋すると云ふことになれば、是實に闇夜を照す光のごとく明かに安息日の守り方が分つて来る。安息日に依つて束縛されるもので

活 基 督

はない。此日には天の父を禮拜しイエス、キリストを學び、我心を研き借と徳とを養ひ立つる爲に心を用ねばならぬ、この簡短なる言葉の中に安息日の制度を破り、更に新たなる土臺の上に安息日をた立てなされた、と云ふ奥深きものがある。

尙ほ進んで可九〇四十に「我儕に敵はざる者は我儕に屬者なり」とある、何うです、己れと異なる説を立つる者があれば、異端邪説として之れを征伐したいと云ふのが人情である、イエスの使徒方が外を歩いて見ると、主の名を騙つて悪鬼を逐ひ出して居る者があつたから、之をキリストに申し上げた、するとキリストは「ナニわれに敵はざる者は我に屬者なり、天地のやうな廣い心を以て其者をば我味方として腹の中に入れて置け」と云ふことを教へになつた。

更に進んで可十二〇十七を見ると「カイザルの物はカイザルに歸し、又

活 基 督

神の物は神に歸すべし』とある。是は政教一致の弊害に對して一大打擊を加へたものである。この聖語は亞米利加合衆國政府に依つて解釋されたので、同國では政事と宗教をば二ツに分けてしまひ、どんな宗教でも構はない、國の治安を妨げさへしなれば信じてても宜いと云ふことになつた。英吉利、獨逸、其他の國々に於ては未だ何うも政事と宗教をば混同して居るけれども、キリストの此の精神が段々行き渡つて來てから、迫害は起らぬやうになつて來た。我日本の憲法第二十八條は此の精神を取つて『日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス』と定めた。

第二には組織的ならざれども首尾貫徹 哲學書なり、倫理學書なりを開いて見ても、チャンと大工が家を組立つるやうに、此所に大黒柱、彼所は隅の柱、此上に横木を横たへるとか、何とか云ふやうな譯で、堅固に組

活 基 督

織されてあるところがキリスト、イエスの御教訓を讀んで見ると、何所が頭か、何所が尻尾か、更に分らないやうに見えるけれども、一々味はうて見ると、首尾貫徹してある。キリストの御教訓の内容に就いては、次回に話をする積りであるから、今日は詳しく申さないが、キリストが初めて、れ叫びになつたのは、神の國と云ふことである。其の神の國に就いては、人間は神の子であつて、其の人間と神即ち天の父との關係、それから罪人が天の父に立歸つて行く、と云ふやうな奥深き眞理が、其中に整然として秩序を爲して現はれて居る。即ち多くの玉が散ばつてあるやうに見ても、其の玉は一筋の糸にて貫かれてあるが如く、キリストの御教訓は終始一貫してある。

第三は、狹隘なるが如く、なれども廣大 夫れは何う云ふことであるか、キリスト、イエスは、かの富士の山が、諸々の峰巒を凌いで高く聳ねて

あるが如くに舞はて在らつしやつた方であるから如何に奥妙深遠なる真理でもれ説きなさることが出来たけれども之を聴く人が猶太人であつて猶太の學問猶太の知識猶太の感情を有つて居つたのであるからして何か話をなされやうとすれば矢張り先きに話し申した如く、猶太の人に一番能く分るのは金のことであるから其の金のことを引いて話になり或は舊約を引いて話になると云ふやうなことであつた一寸見るとキリストは小豆粒のやうな猶太の地から他へ足を踏み出したことがない即ちれ相手になされたのは小豆粒の内に住んで居つた僅かの猶太人であるから極々狭いやうに見受けられるかなれども其れ教訓を味ひ來るときはキリストの頭腦の中には萬國萬民と云ふものが這入て居つたキリスト當時の人ばかりではない天下萬世の後までも含んで居るキリストは有りとあらゆる凡ての人を含め

活 基 督

活 基 督

てお説きになつたのであるからして天地の盡きざる間はわが語の一點一畫も盡きることはないと示しになつて居る即ちキリストは萬人にも關はる所の大いなる真理をお説きになつたのであるからして猶太の衣服を脱ぎ去つてしまひ是れに日本服を着せたときには何うなつて來るか云ふにキリストのれ説きなされたる真理は二十世紀の曉を迎へた今日の我々日本人が之れを承はつたならば我々日本人の耳には非常に新らしき真理として聞かゝるのである支那人に當嵌めても朝鮮人に當嵌めても將た又印度人に當嵌めても尙ほ能く當嵌まると云ふのはキリストが真理を擲んで之を人間の心に當嵌まるやうにお示しになつたからである譬へば孔子の如くたゞ仁義忠孝と云ふことのみをお説きになつたものならば國々に依つて其君に仕へるの道其親に事へるの道も異なるからして或は當嵌まらないやうな場合

活 基 督

が出来ぬかも知れないけれどもキリストは己れの如く爾の隣を愛すべし又爾の敵を愛すべしと教訓になつたのであるから其の愛隣愛敵の眞理が腹の中に能く分つて来たならば夫れが現はれて親に對すれば孝となり朋友に對すれば信實となる譯で之れを當嵌めて行くのは各自の智慧に據ることであるキリストは其人の心の奥底に愛の土臺が築き立てらるゝやうに教へになつたのであるから如何様なる状態になつても其の愛の道が行はれて参りさへすればキリストの聖旨は成つたのであるして見れば此のキリストの御教訓は實に狭いやうであつても廣いと云はなければならぬ。

更に申し上げて置きたいことは此のキリストの教訓の最要點は何所であるか先日にも話し申したが曠昔の教會に於いては羅馬書や加拉太書と思つて居つた十九世紀の半頃には山上の説教と云ふことにな

活 基 督

つた私も基督信者になつた當時は羅馬書加拉太書が非常に宜いと思つて愛讀し夫れから其次には馬太傳の五六七の三章と云ふことになつたが尙ほ奥がある今では何う思ふかと尋ねられたならばキリストの御教訓の神髄とも云ふべきもの即ち此人のやうに説いた者はないと彼の下吏共をして叫ばしめたものは何であつたか太十一〇二十五以下であらうと思ふ是れは諸君も御記憶になつて居るであらうが即ち天地の主なる父よ此事を智者達者に隠して赤子に顯したまふを謝す父よ然れ此の如きは聖旨に適るなり凡て勞たる者又重を負る者は我に來れ我なんぢらを思いません我は心柔和にして謙遜者なれば我を負て我に學なんぢら心に平安を獲べし蓋わが軛は易わが荷は輕ければ也とある即ち御自分が生命を棄て、私共人間の罪惡なり心配なりの悉皆をば其雙肩に負ひ而して罪を犯せる者重を負へる者を息

ませて遣らうと云ふ聖意即ち天の父の愛の塊がキリストに映つて來てキリストが愛の塊となり、總ての人間を脊負うてね立ちなされると云ふ其救主の救主たる所をお現しになつたのであるから、キリストの御教訓の中の最要點と云へば是れであらうと思ふ。

第六章 基督教訓の内容

期は満り神の國は近り爾曹悔改めて福音を信ぜよ(可一〇一五) 神の國と申す語はキリストが發明されたのではなく、舊約時代から用ゐられたもので、出十九〇六に「汝等は我に對して祭司の國となり聖き民となるべし」但二〇四四に「この王等の日に天の神一の國を建たまはん是は何時まで滅ぶること無らん」と録されてある。蘇格蘭の神學者オールと申す人が舊約に四個の王國が引續いて顯はれたと申して居

活 基 督

活 基 督

る其の第一は會長的王國是れはアブラハム、イサク、ヤコブ等が牛羊を引連れて野原に彷徨ふて居つた時代、其次はモーセ的王國と申して是れはモーセがシナイ山に登つて十戒を授き、さうして天に代つて猶太國民を治めた時代、其次は帝王的王國と申して是れはサムエルの時代に猶太國民が四隣の國々には帝王があつて、誠に立派なる宮殿の中に住ひ出るには車馬あり、入るには侍妾ありと云ふやうな譯で、奈何にも威光の赫々たる現狀を見て羨ましくて堪らないから、どうぞ私共猶太人にも如彼云ふやうな帝王を戴かして下さいと願つたので、遂にソロ立てられて王と成り引續いてダビデ之に代り、ソロモン其位を受け、神が此の帝王を通して猶太國を治めなされた時代、其次は預言者的王國と申して、是れは帝王の政事が衰へ、何うも不義淫行を行なふやうな者が王の位に即いて居るから、神の聖意が決して帝王を通じて行は

活 基 督

れないのである、そこで預言者が起り、天に代つて神の聖意を傳へ、大聖
 意が此の預言者に依つて遍く國內に行はるゝと云ふ意味であつた、キ
 リストの前に「バプテスマ」のヨハネが現はれて「ヨルダン河の邊で説教
 をいたしたときにも『天國は近けり、爾曹悔改めよ』と叫びイエス、キリス
 トも開口一番『期は満り神の國は近けり、爾曹悔改めて福音を信ぜよ』と
 説き玉ひ、舊約の時代から續いて來た神國てふ思想は「バプテスマ」のヨ
 ハネに傳はり、ヨハネが説いた神の國なる考は、キリスト、イエスに依つ
 て更に猶太人民に傳へられたのである。
 けれどもキリストが其の神の國と云ふ語を傳へなされたときには、
 語と云ふ上から申せば同じ文字であるが、其の内容を深く味はつて見
 ると全然別天地を現はしたと申しても差支はない、神を愛し人を愛せ
 よと云ふことは舊約の時代にも傳へられたけれどもキリストが其事

活 基 督

を傳へるときには「我爾曹に新しき誠を與へん」と叫び玉ひ新しき
 誠と云ふのであるから猶太人が耳を傾けて聴くと「爾曹互ひに相愛す
 べし」と教へ玉ふ、それならば何も新しいことはない、申命記に録いてあ
 るやうな語である、只新しいと云ふのはキリスト、イエスが如何にして
 四邊の人々を愛するか、其之れを愛するの動機といかに之れを愛すべ
 しか、其道とをれ示になつたことが肝腎である、假令語があつても實が
 行はれなければ何の役にも立たない、此神の王國と云ふことに就いて
 も矢張り同様で、フェーベルンの申した語に「天國とは地上に建てられ
 た世々の王國と區別したものである、又神の國とは悪魔又は惡の王國
 と區別したものである」と天國と云ひ、神の國と申しても、是れは意味に
 於いては同様である、いづれも神の御支配が遍く及ぶと云ふ事柄を意
 味したものである。

活 基 督

そこで舊約時代の神の國とキリストの神の國とは何う違ふか、又教會と神の國とは何う違ふかと云ふ問題が起るであらうが、第一に廣さから申すと、舊約時代の神の國と云ふは、猶太國の猶太國に神の政府を打建つると云ふ小さなものであつて、キリストの神の國と云ふのは世界的とも申さうか、否、寧ろ宇宙的と云ふのであつて、非常な廣い意味である、預言者の頭腦の中には猶太國民と云ふ國家的精神が多く入つて居つた、キリストの頭腦の中には萬國萬民と云ふ宇宙的精神が入つて居つた、又舊約時代の神の國と云ふのは外部に現はれたものである、會長的と云つても、モーセ的と云つても、帝王的と云つても、預言者的と云つても、表面に顯はれたものである、尤も預言者的と云ふときは大分内部に入つたやうにも思はれる、然るにキリストの建てなされる王國は、道德的、心靈的と云ふのである、神の國は此所胸臆に在るので、爾曹

活 基 督

の中に在り、爾曹の意に在りと云ふのである、そこでキリストは人間の意の中に此の聖國をね擴げなされるを積りてあつた、舊約時代の王國は現世に限られたものである、此世限りのものである、キリストの建てなされる王國は、先づ御互ひの意の中に始まるので、一夜の夢の覺むるが如く消えてしまふかと云ふと、さうてはない、矢張り千億萬年の後までも續くものであつて、謂はゞ現世から來世を突通して建てられると云ふ盛んなる王國である、それならば世界の表面に建てられてあるキリストの教會と神の王國と同じものであるかと云ふと、然らず、教會は今日では世界の表面に廣がつた大きなものである、けれども神の王國と云ふ上から申すならば、此の教會は其の一分たるに過ぎない、或人は神の王國は教會の中に在り、又教會の外に在りと申して居る、實に此の聖國の廣さは何と形容し

活 基 督

て宜いのであるか、全世界の總ての教會も其の一分たるに過ぎないと云ふのだからして私共の眼をば廣く宇宙に及ぼすときには此の聖國の中には神は勿論のこと、天の使も私共より先に死んだ人も皆入つて居る、夫等の者が其中に籠つて居る而已ならず、現世に在る所の者も皆其中に籠つて居ると云ふ譯になるから頗る宏大なるものと云はなければならぬ、其の聖國が互ひの腹の中に在ると云ふのは御互ひが其の聖國の中の一人に成ると云ふ意味になつて來る。

既に王國と申すならば、其の王國の長は誰であるか、之れには二ツの意味がある、此の王國の長は無論神であるけれども王としての神と申す考が一ツ、それは太五〇二十一から二十六までをね開きになると兄弟を指して馬鹿と云ふ者は審判かるゝとか、或は其の兄弟を狂妄と云ふ者は審判かるゝとか、此の神が王としてね審判さなされるゝと申すこと

活 基 督

が録いてある、太二十五〇三十一から四十六までを見ると、世の終りに公判廷が開かれて、牧羊者が羊と山羊とを別が如く、世界の國々から總ての者を集め來つて、義しき者には褒美を與へ、惡しき者には罰を與ふると云ふことが録いてある、即ち王としての神が善人、惡人、義人、不義人をね審判さなされることを云ひ現はしたものである、今一ツは父としての神であるが、是れは太五〇十六、同五〇四十五以下、同六〇六以下、此邊を開いてね讀みになると、天の父は親が子を愛するに優つて、總ての人間を同じやうにね愛しなされ、正しき者の上にも正しくない者の上にも善き者の上にも惡しき者の上にも同じやうに日を照し、雨を降らし給ふ」と録いてある、又其の神は空の鳥を養ひ、野の百合花の花を麗しく装はせ給ふからして、私共總ての人間を養ひ、人間になくて叶ふまじきものをね興へなされる程の深き愛の神であることが教へてある、

此の神此の王としての神此の父としての神と申すのが神の王國の長である帝である。

それに續いて更に二ツの大きいなる考が籠つて居るそれはイエス、キリストは神の子だと云ふことである、太十一〇二十七に「父は我に萬物を手だまへり」同十一〇二十七以下には「重を負る者は我に來れ」重を負る者は天の父に來いと云はずして我は來れと云つてある、同二十八〇十八に「イエス進みて彼等に語りひけるは天のうち地の上の凡の權を我に賜れり」此の天地のあらゆる權を我に賜つたと云ふ神は神の王國の長であるといふ意味を言ひ現はすと共に神の子なるイエス、キリストが其大なる王としての神父としての神に代つて此の世の中に顯はれ、人間を支配なさるのであるから私共人間は此のイエス、キリストに審判かれねばならない此のイエス、キリストに支配せられねばならな

活 基 督

いと云ふ眞理を言現はしたものである。

今一ツは人の子と云ふ考である是れは諸君も味ひになつたことであらうがイエスの母が兄弟姉妹を連れてイエスが御説教をなされてある最中に訪ねて來た其時にイエスは聽衆に對つて「天の父の聖意を行ふ者これ我母なり我兄弟なり我姉妹なり」と仰せられた人の子と云ふときにはイエス、キリストが私共人間の一人と成つて此の人間が神に仕ふるに當つては如何なる心持を有たなければならぬかさうして四邊の人々に對しては兄上が其の弟妹に對するが如き同情の心を以て總ての人間に押及ぼして行くといふ意味も籠つてある殊に人の子としては罪人なる私共人間に代つて生命までも棄て、救ふて遣らうと云ふ意味が籠つて居る神の王國の長は神であるが其の神が私共に現はされた者は即ち神の子イエス、キリストであつて其のイエス、キ

活 基 督

活 基 督

リストが罪人なる私共を救ひ、神の聖前に私共を引揚げ、さうして神と結び付くやうになされたので、是れがイエスキリストが人の子であると云ふ所以である。

更に進んで申し上げたいことは、其神の王國の臣民とは誰かと云ふと、日本國には日本帝國の臣民あり、英吉利國には英國民と云ふのがある、して見ると神の王國には神の王國の民がなければならぬ、是れは誰か、聖書の上で申すならば、私共神の子供となつた者である、諸君は總ての人間が神の子ではないか、それに神の子となつたものと云ふは、聞かぬいと云はるゝかも知れないが、神の子となつたものと云ふのには意味がある、罪を犯し汚に陥いつて此の王の御支配を受けないものは神の子ではない、歐羅巴、亞米利加の如き基督教の盛に擴まつた國に於いても、今尙神の御支配を受けない者がある、それは神の子ではない、昨日

活 基 督

一昨日までも如何なる罪を犯し、如何なる汚の中に陥つて居つても、今日神の子となつた者は、其神の王國の臣民である、今諸君に向つて子として、の本分は何であるかと尋ねたならば、諸君は異口同音に父母に全く従ふのだと仰しやるであらう、神の子としての本分、即ち天の父に信任すると云ふことに就いては、太六〇二十五以下をお讀みになると、是故に我なんぢらに告ん、生命の爲に何を食ひ何を飲また、身體の爲に何を衣んと憂慮こと勿れ、生命は糧より優り、身體は衣よりも優れる者ならず乎、なんぢら天空の鳥を見よ、稼ことなく、穡ことを爲す倉に蓄ふる、ことなし、然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり、爾曹之よりも大に勝るゝ者ならず乎、爾曹のうち誰か能れも煩ひて、其生命を寸陰も延得んや、また何故に衣のことを思わづらふや、野の百合花は如何して、長か

活 基 督

も其装この花の一に及ざりき、神は今日野に在て明日爐に投入らるゝ草をも如此よそはせ給へば況て爾曹をや嗚呼信仰うすき者よ、然ば何を食ひ何を飲なにを衣んとて思わづらふ勿れ、此みな異邦人の求る者なり、爾曹の天の父は凡て此等のもの、必需ことを知たまへり、爾曹まづ神の國と其義とを求よ、然ば此等のものは皆なんぢらに加らるべし、兄弟姉妹、天の父を信任すると云ふことになれば、管に御互ひの心懸を神に任して救はれると申す意味ばかりではない、御互ひの肉體の事も、全く神の聖手に任して其救を得ると云ふ信任がなくてはなるまいと思ふ、私は豫て話を申したこともあるが、先づ神の國と其義を求めよ、と申す聖語は廿五年の間一日の如く信仰いたして居る、如何にして其の信仰が起つたか、と尋ねなれば、私が一身を捧げて神の御用を力むる者になりたいといふ志を起して、京都の同志社へ参らんとして學

活 基 督

資金もなければ殆んど旅費もないと云ふ場合に接したときに「先づ神の國と其義を求めよ、さらば無くて叶ふまじきものは皆爾に與へらるゝ」と云ふ聖語が愛する師の口を通して我胸中に深く打込まれたのである、我は身を挺して神の御用を務むるのであるから、我必要なるものは必ず神が供へ給ふと云ふ信任を以て故郷を乗り出し、京都の同志社へ参つて三年の修業を卒へ、それより後は或は教員となり或は牧師となつて、二十五年の星霜を経た今日に於いては、神が此の信任を一度でも破りになつたか、一度でも空しくなつたかと尋ねて見ると、未だ曾て空しくなつたことはないのである、我輩の胸中に於いては昔の浪人者が大名に抱へられたときのやうな思を以て神に抱へられたもの、と信任をし、奈何に窮迫の場合と雖も、神は我を見捨て給ふことはない、必ず我に必要なものを給はると思つて、其の精神を貫いて來たの

活 基 督

である、それならば何も働かず、何もせず待つて居れば神は我を養ひ給ふか、神は我に必要なるものを供へ給ふかと云ふと、そうではない、各々天より授けられた職があるからして、其の天職を忠實に勉め、さうして萬事を神に任せ申すと云ふことになれば、神は我を養ひ、我を育て給ひ、縛々として餘裕があると云ふ點まで達することが出来るであらうと思ふ、何うしても此の神の聖國に入つたところの臣民は天の父に萬事任せ申すと云ふ方面を深く味はなければならぬ、たゞ道徳家になつても駄目だ、たゞ正義を以て立つと云つても駄目だ、道徳と云ひ正義と云ふよりも今一步進んで天の父に歸依し、その聖旨に全く従ひ申すと云ふ信任が出て來なければならぬ。

そこで其の信任があるとすれば、其次は何が心要であるかと尋ねて見ると、義と云ふものである、太五六七の三章を繰返して讀みになつて

活 基 督

も亦キリストの御教訓は四福音書を貫いて居るから、之を讀みになつても、此のキリストの教は學者よりも「パリサイ人」よりも勝つて心の底から正しくならなければ駄目である、女を見て色情を起すものは、其の女と同衾をしなくつても、心の中は既に姦淫したるなりと云ふ教訓である、人に對するの義であれば、先づ人々の見る所だけを立派にして置けば宜いけれども、神に對するの義は目に見ゆる所も見ぬ所も、内も外も同じやうに全く正しくして置かなければ、神の前に立ちて義と申すことは出來ない、此義を知らない國民が會社員となれば、會社の金を遣ひ込み、銀行員となれば、銀行の金を遣ひ込み、被雇人となれば、雇主に迷惑を懸けると云ふやうなことで、表面ばかりを立派に飾つても、其内面は腐敗で満ち切つて居るのである、日本の教育界が今日の如くに亂れたと云ふのは、此の義を知らないからである、表面ばかりを立派

活 基 督

に飾つて居るからである。某師範學校の校長の如きは生徒を集めて今日日本に於いて斯くの如き收賄事件が起つたのは即ち教育界の爲に實に慷慨すべきことだと云つて話を居る所へ令狀が来て引縛られて行つたと行ふが何うてせう實に鐵面皮な男で或は嫌疑ばかりであるかも知れないが何か陰暗い事をして居るにも拘はらず人々の前に立つては義を装ひ頻りに慷慨談などをやつて居る而して其の身が引張られて行くとは是れ即ち義を知らないからである。キリストの義を説きなされたる義は左様な表面の義ではない。心底からの義である。併しながら人間は只義と云ふ方面になれば冷たくなるものである。奈何に義に厚き者と雖も一朝事あるときには極く冷たいと云ふやうな弊があるからしてキリストは先きに話申した如く父は善き者にも惡しき者にも正しき者にも正しからざる者にも同じく雨を降し日を

活 基 督

照したまふとれ敎になつて居る尙其の聖語と共に爾曹の敵を愛せよとれ説きになつたのである。我四邊に在る人々を愛するは何の價値があるか我を愛して呉れる者を愛するのは税吏でも罪人でもするではないか爾曹は敵をも愛しなればならないと云ふ此の愛敵の敎訓を授になつたのは實に其の意の中は熱かなる温泉の湧き出づるが如く我四邊の人々に對しては温かなる愛の泉を以て之れに接しなればならないと云ふ敎訓である。神の聖國の民と成る者は神の子である。其の神の子たる者は父を信じ正義と仁愛の二ツを以て何所までも貫かなければならないと云ふのである。此の三ツが備はりさへすれば其他にも種々必要なものはあるけれども夫等は皆是れから生出して來るのであるからキリストは其の大本を得なければならぬと示になつた。何程倫理學の論説に精しくあつても何程道徳上のことを諳

活 基 督

んじて居つても此の三ツが缺けて居つたらば實行は出来ない此の三ツが腹の中に握れて居つたならば仁義禮智信は皆行はるゝのである、即ち倫理道德とても此の根元を清めなければならぬと申す所から之れに力を入れて教になつた譯であらうと思ふ。そこで其の王國には如何にしたならば入れるか自分達もさう云ふ悦ばしい聖國の民と成りたいが何うしたら宜からうかと云ふと、是れはなかく、面白キリストは幼兒のやうになれ、又更生れ、又悔改めよと仰しやつた私は之れを何と形容したら宜いか分らないが神の聖國には素裸體で入れと云ふことではないかと思ふ、何うせう自分は總理大臣である、と云ふ其の總理大臣と云ふ片書を此所に載せて居つたら此の聖國には入れない、自分は哲學博士、自分は農學博士であると云ふ、其の片書を此所に附けて居つたら神の聖國に入れ、自分は幾拾萬

活 基 督

圓幾百萬圓の資本を有つて居ると云ふ片書を持つても入れない、素裸體で入れと云ふのだから面白い片書があつては不可ない、それならば昨日は泥棒をした、昨日は姦通をした、イヤ何うも昨夜は人を擲いたと云ふ罪と惡とを行ふ者が入れると云ふとそれも神の聖國に入る資格がない、罪と惡に對しても素裸體にならなければならぬ、偽善と詐偽があつたら何うかさう云ふ偽君子も亦之れに入る資格がない、それでは何うしたら宜いかと云ふと高慢なる者は謙遜にならねば入れない、皆片書を棄つる氣にならねば神の聖國には入れない、それならば自分のやうな者は此の世の中に於いて詰らないもので何も出来ない、と云ふ善い語で云へば謙遜惡い語で云へば自暴自棄、即ち卑屈に陥つて居る者が入れるかと云ふと、さう云ふ者も入れない、それなら卑屈な者は何うしたら宜いかと云へば、自分は神の子として此の世の中に生出

活 基 督

されたものだからして、斯々の點に於いては自分はこの世の中に何も出来ないけれども、是れは神より授けられたるものであるから、自分は此の世の中に於いて何か神の御用が勤まると云ふ自己の本領を見出だし、其の本領に依つて立つと云ふ元氣を有てる者でなければ不可ない、卑屈に甘んじ、自暴自棄に陥つて居ると云ふ連中は、此の聖國へ來ても詮方がない、神の聖國の民は此の世の中に生れた以上は、兎に角生甲斐のある人間に成らなければならぬ、自分は何も出来ない、按摩をするより他に詮方はないと云へば、其の按摩でも宜しい、人の肩を摩るときには一片の愛情を加へて上下拾錢と云ふ尋常の按摩法では不可ない、敵をも愛せよと云ふ愛の心を以て掴むのである、學者よりもパリサイ人よりも正しく成らなければならぬと云ふ義を以て之れに接するので、穢い汚れたる話、之れを柳に風と受流し、さうして間がな隙がな

活 基 督

正しき事を思ひ、其人に話をしつゝ、肩を掴む所にチャンと按摩の本領が備はつて居る、平素は下賤な勤を執るなど、云つて世の人から賤められて居る者の意の中にも神の王國が建てられて居る、其の人々は眞個の精神本領を知つて神の聖國に入つた者である、車夫でも良家の下女下男でも宜い、眞個に己れの本領を知つて神の國に立向ふと云ふのが大切である。

斯くの如き譯であるからして、高慢なる者は宜しく謙遜になり、卑屈なる者は宜しく己れの本領を知るべし、それならば利己心の強い者は何うだ、己れあることを知つて人あることを知らない、と云ふやうな輩は神の國には入れない、利己心の強き者は宜しく利他心となるべし、己がことのみを顧ずる人のことをも顧よと云ふ教訓を味はひ、心底から人を愛すると云ふ精神に變つて來なければならぬ、兎にも角にも神の聖國

へ入りたいと思へば幼兒の如く浮朴になり、悪い事があれば悔改め、己れが間違つて居れば更生り、さうして其所へ入つて行くことが太切である。

第七章 愛隣の妙旨

われ新誠を爾曹に予ふ即ち爾曹相愛すべしとの是なり我なん

ぢらを愛する如く爾曹も相愛すべし(約十三〇三十四)

爾心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛す

べし亦己の如く隣を愛すべし(路十〇二十七)

人間互ひに相愛すべきは當然のことであるが不見不知の人を愛する

ことは難しい、只漠然と天下の人を愛すると申すことは出来るが、それは實際無意味と申しても宜い譯であつて、さう汎く愛を及ぼすことは

困難である、そこで隣を愛すべしと云へば先づ我四邊に在る近所合壁

の人から愛を始むるのであるから隣を愛せよと云へば餘程意味が切

になつて来るやうに思ふ、都會に住む者は隣と云ふ意味を知らない、貴

族又は有福家も隣と云ふ意味を知らない、田舎に住める者又は單純な

る生活をなす者は隣と云へば親類朋友と云ふやうに大切なる意味を

含んで居ることを知る、キリストが隣を愛すべしと仰せられたのは其

點に意味があらうと思ふ、先づ近い所から始めて遠きに及ぼすやうに

と云ふことであらう、然るに此の己れの如く隣を愛すべしと云ふ教訓

は舊約聖書の中にも利十九〇十八に既に録してある詞であつて、汝仇

をかへすべからず汝の民の子孫に對ひて怨を懐くべからず己のごと

く汝の隣を愛すべし我はエホバなりと、それに主イエスは何か珍らし

さうに使徒方に向つて『我新らしき誠を爾曹に與へん』と仰せられたか

活 基 督

ら彼等はどんな新らしい誠を授けらるゝかと思つて耳を傾ければ汝等互に相愛すべし』と云ふ言であつた此の相愛すべしと云ふことであらば、今申上げたやうに舊約にも出て居ることであつて、何も新らしい言ではない、又東洋に育つた御互ひに取つては、孔夫子の教訓に『博く愛する之を仁と謂ふ』と申す詞があるから、何も新らしいことではない、只其隣を愛せよと云へば、是れは御互日本人には、聽馴れない熟語であるから、一寸耳新らしく聞ゆるけれども、隣を愛せよと云ふのも人を愛せよと云ふのも同じ意味であると承はれば、それなら別に何も新らしいことは、ない、當時の猶太人に取つても、現今の日本人に取つても、別に新らしいことは、ない、それに主イエスが態々勿體を附けて我新らしき誠を爾曹に與ふと仰せられたに就いては、何か其所には、深い、極めて、深い意味がなければなるまいと思ふ、諸君は之れに就いて、何ぞれ考になつた

活 基 督

ことはあるまいか、或人は成程舊約の教訓にも己の如く爾の隣を愛すべしと云ふことがある、東洋にも博く愛する之を仁と謂ふと申す詞がある、と云ふが、それは一向實際に行はれて居なかつたから、あれども反古のやうなものであつて、何も効能はないのである、主イエスが教へになつて、初めて隣を愛するの道が實際行はるゝやうになつて來たから、そこで新なる誠と云ふ意味が出て來るのだと云ふ、成程それもさう云つて見ればさうかも知れない、併し私はもう少し其所に深い意味があらうかと思つて居る。

今日の説教の題は愛隣の妙旨と申すのであるが、妙旨と云へば大なる趣意、或は妙味と云つても宜いので、なか／＼深い味ひがある、左すれば何所に妙旨があるか、何所に妙味があるかを考へて見なければならぬ、約十三〇三十四に『われ新誠を爾曹に予ふ、即ち爾曹相愛すべしとの

是なり我なんぢらを愛する如く爾曹も相愛すべし此の我なんぢらを愛する如くとある此の我と云ふ字と如くと云ふ字に無限の意味が含まれてあるやうに思ふ誠に簡短なる聖語であるけれども愛隣の妙旨愛隣の妙味と云ふものが含まれてある是れは詞が餘り簡短であるが故に殆んど其の奥深き意味を尋ね知ることが出来ないと言ふ感も起るが路十〇二十五以下に示されたるサマリア人の比喩を味つて見たい教法師がイエスに向つて如何にいたしたならば永生が受けられませうかと云つたときにそれは律法を行ふたら宜い律法と云ふのは何であるかと云ふからイエスは神を愛し隣を愛する事だと示しになつたすると教法師が何か言逃れをしやうと思つて佯爲けた顔をなし先生其隣とは誰であるかと尋ねたときにイエス、キリストは或人がエルサレムからエリコの方へ旅行をいたしたとて旅人の遭難談

をなされた此の二ツの邑の間は或人が其の土地の模様を知りたいと思はゞ海が荒れて大浪が山のやうに打來つて居る真最中に俄に其海が凍つてしまつたと假想すれば其光景が眼中に浮ぶと云つた其の意味は山又山谷又谷と相連なり其山は殆んど全元の山で巖石が彼方此方に在るからして泥棒が旅客を窺ふには倔強の場所である、それで此路は血の往還と名づけられてある此所で屢々賊難に遭ふ恰どイエスのなれば比喩は一人の旅人が其路を歩いて居つたときに山陰から賊が現はれて來て其者の衣服を奪ひ其上に傷を負はせ突き倒し逃げてしまつた其時エルサレムから爾の隣を愛すべしと云ふ教訓を百も承知いたして居る所の祭司が歩つて來た血塗れになつて居る旅人を見ただれども見過して行つた其次にレビ人が歩つて來た是れも隣を愛すると云ふことを百も承知して居る、それに又見過して行つてしまつたと

活 基 督

ころが猶太人からは非人乞食とまで輕蔑されて居るサマリア人が驢馬に乗つて其所へ歩つて来たときに何ぞ圖らん染流血になつて旅人が苦しんで居るから直ちに下りて其持合せの油と酒を取出して傷口を洗ひ自分の衣服を引裂いて細帯をしてやつたそれから其の負傷人を自分の乗つて来た馬に抱き乗せてエリコの旅邸へ着き其家へ連れ込んで晝夜介抱を爲し明朝出立をしなければならぬと云ふ場合になると銀二枚を主人に與へてどうぞ介抱を頼む若し是れよりも多くの費用が要つたならば又此方へ来たときに償ふからと云つて別れた此傷を受けた人の爲には誰が隣の人であるかと云ふことである此の比喩は諸君が屢々讀みになつたであらうが實に放蕩息子^の比喩に比べて決して劣ることのない尊いものである何うであらうか不見不知のサマリア人が其所へ來合せて馬から下りて傷を洗ひ細帯を施して

活 基 督

呉れたと云ふだけでも非常な愛であらう更に自分の馬に抱き乗せて之れを自分が曳いて行くと云ふに至つては何等の愛と申さうか尙旅邸へ連れ込んで終夜介抱をいたしたと云ふに至つては稀なる愛と云はなければならぬさうして明朝立つときに左様ならと云つて立つても宜いのであるが銀二枚を主人に與へて介抱を頼み若し是れて費用が足らなかつたならば歸途に償ふからと云ふに至つては殆んど遺憾なきまでに行届いて居ると申しても差支はない是れは何を意味するのであらうか此の強盜に出遭つて衣服を剝がれ傷を負けたと云ふ意味は私共人間が此世の中に於て罪を犯し之が爲に起ちも這ひも出来ないやうな有様になつて只頼みとする所の親類も朋友も學校の先生達も宗教家ももう手の着けやうがないと思つて皆見過しにして放つてしまひ何人も我を憐れんで呉れる者が不在其所へ不見不知のサマ

活 基 督

リア人が歩つて来て驚くばかりの親切を施したと云ふのは、もう世の中の宗教家も教育家も又は親類朋友も罪人に對しては如何とも爲し難しと云ふ場合に陥つて居る所へ思はぬ方角から獨りの救世主が現はれ來つて無限の愛を施し給ふたと云ふ意味である、我なんぢらを愛する如くと云ふ此の我と云ふ意味は主イエスが私共の罪人を救はんが爲に天の最と高き位を棄て難きことと思はず塵の浮世に降り罪人の友となり罪人の間に立交つて教訓を垂れたまふたことである、それからキリストの御生涯殊に三年の間は此の罪人を救はんが爲に千々に心を苦しめ教訓と云ふ教訓は遺憾なきまでに施しになつたかなれども、尙我々罪人は其罪を感じないのである、遂に主イエスがゲツセマノの園に血汐の如き汗を流して祈りになり、十字架上一命を棄てになつたが、諸君其の主イエスが十字架上に生命を棄てになる

活 基 督

と云ふのは、此のサマリア人が晝夜介抱をして旅邸を立つのである、其の旅邸を立つときに尙主人に云ひ残して介抱をして呉れる若し費用が増したならば償ふと云つたのは、主イエスが人間の爲に救世の大道を立立てになつて此世を去りになるかなれども、尙私共に慰むるものを與へるといふ御約束があつて、聖靈が此世へ降りたまふときには、私共に總ての眞理を思ひ出さしむると云ふことで、其の聖靈が此世に在つて實に主イエスの御在世のときには使徒方も味ふことの出來なかつた無限の愛を味ふことになつたのである、それで私共が親兄弟親戚朋友を始め近所合壁の人々、或は同郡同村同縣同國の人々を愛すると云ふ、此の愛隣の道を盡さうと云ふ考になり、之を實行するには、我なんぢらを愛する如くと云ふ所に眼を着けなければならぬ、主イエスが私共を愛して下さる如く、私共は四邊の人々を愛しなければならぬ、己

活 基 督

れの如く爾の隣を愛すると云ふは、成程それは舊約の教訓としては實に味ひのある教であるけれども、己れを愛する如くと云ふ人は己れを餘程愛するものであるけれども、己れと云ふものが人を愛するの程であるならば、其愛は實に淺慕なる愛になつてしまふかも知れないけれども、今ね聽きなされる如く我なんぢらを愛する如くと云ふ即ち主イエスが私共罪人を愛しなされる如くと云ふことになつて來ると、殆んど其所に底の知れない奥深き愛があつて、主が己れに敵對する者の爲に生命を棄て、之れを愛しになつたのであるから、主イエスの愛の深さ、廣さ、長さ、高さ、と云ふことを考へ來るときに當つては、もうどれくらゐ深い愛が其中に籠つて居るか分らない、其の主イエスが私共罪人を愛しなされたる如くに、我四邊の人々を愛すると云ふことにならねばならぬ。

活 基 督

若し諸君が羅十三〇八の『なんぢら互に愛を負のほか凡の事を人に負ふこと勿れ蓋人を愛する者は律法を完全すれば也』と云ふ聖語を考へになつたら何うてせう、此の愛を負ふのほか凡の事を人に負ふこと勿れと云ふのは決して負債をするなと云ふのである、また何事でも人に借を拵へるなと云ふのである、けれども愛の負債だけは致方がない、尙羅一〇十四『我はギリシヤ人及び異邦人また智人れよび愚人にも負する所あり使徒パウロは智人愚人は勿論他國の人々に對しても自分は負債がある』と云つた何の負債があるかと尋ねて見たならば愛の負債がある、と云ふのである、日本人は或は餘り氣に懸けないかも知れないが實際に義務責任を重んずる所の者が負債を拵へたと云ふときには、寢ても覺めても起つても居ても、其の債務を果すまでは安心することが出來ないのであつて、それは非常に氣懸りになるものであるが、使徒パウ

活 基 督

ロは凡の人に借金を負うて居ると云ふ感覺を懐いたから神の聖教を傳へて羅馬人でも希臘人でも猶太人でも何れ如何なる國の人々にも、悉く人間と名の附く所の者には皆自分が負債をして居るから此の借金を返さなければならぬと云ふ精神になつて三十幾年の生涯と云ふものは全く己れを忘れて或は盜賊の難山の難河の難陸の難等種々様々の困難の中を少しも屈せず撓まずして是れ日も足らずと云ふ考になつて働いたのである、蓋し使徒パウロが愛の借金を返したいと思つたからである、斯る考を起して來た其の原因は何所に在るかと思ねれば「我なんぢらを受する如く爾の隣を受すべし」と云ふキリストからそれだけ深く四邊の人々を受せよと云はれて見れば私共は生涯何十年生きて居つても愛の借金を拂ひ盡したと思ふときはないのであるからパウロは他の負債は有たないが愛の負債は如何とも仕難しと思つ

活 基 督

て愛の借金の他は人に何物をも借りてはならぬぞよと云ふ教訓を立てられたのではないかと思ふ。此のキリストの御教訓を味つて第一に思ふ所は我である、又サムリア人の比喻を讀んで感じたのは我馬に乗せて自から其の口取りとなり、旅邸へ連れ込んで親から其の負債人を看病して親から愛の道を盡したと云ふことである、諸君茲に有福家があつて或は孤兒院へ何萬圓或は病院へ何十萬圓と云ふ寄附をしたならば、それで愛の道が盡きたのであらうか眞實の愛から見るとそれは愛の一端であつて、たゞ金子を出したばかりである、けれども其の有福家が自から病院へ行つて親から病人を問ひ慰めたと云ふことになれば如何であらうか或は孤兒を抱いて育つると云ふことであつたならば愛の至極と申しても差支がなからうと思ふ、フロレンス、ナイチンゲールがスコタリーの病院へ出

活 基 督

掛けて行き、金を集めて負傷兵に撒布したならば、それを愛の道が盡きたかと云ふと、さうではない。彼女は兵隊の傷を洗ひ、繻帯を施して、尙更に暇を拵へて、彼等の枕邊に近寄り、兄は何所の國の人であるか、兄の故郷に父母は在まらぬか、若し手紙でも書くならば、私が書いて上げるから、其の意味を云ひさへすれば、宜いと云つて、代筆をしてやると云ふやうなことで、負傷兵に就いて親しく愛の道を盡したものであるから、スコタリ、の病院内に遣入つて居つた幾百人の兵隊は、皆悉くナイチンゴールの親愛を受くることが出来たのである。愛と云ふものは、第二の者を使つて施すと云ふのでは、達せぬ。愛は親から施すと云ふ所に秘密が存するのである。諸君も御實驗なされたことがあらう。同じ母の腹から生れた子供、其の一人は母親が親から育て、他の一人は乳母の手に托するか、或は里見にやつて之れを育てたと云ふときに、後の方は母親が

活 基 督

金を仕拂つて乳母を抱へたのである。金を使つて里見にやつたのである。其の子供が乳母を通して母の愛を受けたと、母親が親から育て、呉れた、其親愛とを比べて見るときには、親から恩愛を受けたと云ふ子供の方が、どれくらゐ深く母親の愛を感じて居るかも知れない。主イエスが此の世の中へ降りになり、罪人の間に交はり、謗られ罵られても厭はず、罪人と食を共にして、親から愛を施しになり、遂に十字架上に生命を棄てになつたと云ふのは、愛の至極である。茲に一ツ考へなければならぬことは、人頼みをする所の愛は決して達かない。何程善い乳母を雇ふて、金は彼が満足をする程やつても、乳母を通しての愛は決して達かないのである。けれども母親が親から其の子供を抱き育てると云ふときに、方つては、先の先までを考へて、其の緻密なる愛を子供の上に及ぼすのである。右のサマリア人の愛の施し方を御覽なさい。是れ

活 基 督
 が人頼みの愛であるならば、さうか其所に倒れて居つたら其力共
 が氣を注げてやれさうして旅邸へでも連れ込んで主人に吩咐けて介
 抱をさせよと云ふくらゐなことで済むであらうけれどもさうでなく
 して自分が旅邸へ連れ込んで自から終夜介抱をしてやり翌日分袂に
 望んで、主人に向ひどうか介抱を頼むと云ふ言葉と共に銀二枚を添
 へた所は實に深い非常に深い愛が籠つて居る、どうか介抱をしてやつ
 て呉れると云ふ其どうかと云つて頭を低げて頼んだ所は此處に録い
 てなければ、我子を他人に頼むときのやうな感じになつて其の負傷
 人を頼んだに違ひないであらうと思ふ、其上に費用が増したならば私
 が償ふと云ふに至つては實に愛の底を叩いたと云ふ程行届いて居る、
 是れが先づ親から愛を施したと云ふことである。
 其次に私共の愛は何所までも行届く所の愛でなければならぬ私共が

活 基 督
 規則立つてやる愛は行届かない私は亞米利加などの慈善團體の働さ
 を見たが其の働振りに就いて満足の出來ない點があつた、是れは決し
 てサマリヤ人の愛ではない、此の祭司だのレビ人だのが盡す所の愛は
 何所に在るか、と云ふと規則通りに盡すのであつて、人の見て居らぬ所
 では見過して行つてしまふ、即ち心底からの愛でないから違かない、け
 れども親から盡す所の愛であつたならば違くのである、然るに慈善團
 體の愛が違かないと云ふのは餘り廣く事業をするので、其の思立つた
 人の心の中には自ら手を下したと云ふ愛があるけれども、餘り多く
 の人を使ふ、即ち第二者、第三者を通して行く所の愛であつて、其の働く
 所の人は何れも金銭で働くと云ふやうなことであるから、何うしても
 違かないのである、慈善團體などが餘り大きな仕事をしやうと思つた
 ら失敗である、實際の仕事と云ふものは僅か三人か五人の人を集めて

活 基 督

やるより外に仕方がないのであるから私共が茲に愛を考へ又愛を致さうと云ふときには即ち親身の愛であつて手の遠く愛でなければならぬ私共は毎も云ふ私共の所へ愛して貰ひたいと云つて集つて来る所の人があるならば夫れは多少其人に向つては愛を施すけれども若しも其人が脊を向けて悪口でも云つて行つたと云ふことを聞くと自分には責任を脱れたと思ふのであるけれども眞個の愛即ち我なんぢらを愛する如く互に相愛すべしと云ふキリストの愛なれば脊を向けて悪向を言ひ逃げて行く所の者を何所までも逐駈けて行つて其人を捕虜にするまでは止まないと云ふ愛情が其所に發つて来なければならぬ目の前に居らぬからそれで終了だと云ふことであるならば私共の愛が甚だ不行届なものである眞個の愛であるならば彼のヨナタンが討死をしたときダビデが其の愛を思ふと共に彼の遺した不具の子供を自

活 基 督

分の家に引取りさうしてソロの領分を悉く返し與へ自分の食卓に三度々々侍らして共に食事をしたと云ふことが録してあるがこれが眞個に行届いた所の愛である最うヨナタンも死んでしまひ其の息子は不具であるから仕方がないと云つて少しばかりの扶持を與へて何所かの片隅に押込んで置けばそれで自分の愛の道が立つたと思ふならば其の愛や實に冷たいものであるけれども彼のダビデがヨナタンの子に對して盡した所の愛は實に温かなる愛即ち親ら下す所の愛であつた自分の食堂へ連れて来て自分の食卓に就かせさうして自分が喰ふ所の食物を共に喰させたと云ふに至つては大方自分が其の料理を皿に注いでヨナタンの息子に與へたであらう此所に至つてダビデは一方に於いては實に大いなる罪を犯たかなれども彼れが神の聖前に救はれたと云ふのは斯くの如き温かなる心を以て愛の道を全うし

たからであるかも知れない。
 どうか私共は諸君と共に、我なんぢらを受する如くと云はれたる其主の奥深き愛を味うて、主の愛に充さるれば満さるゝほど、我隣に對しての愛が深くなつて來るやうにしたいものである。己れの如くでは不可ない、それは舊約時代のことである、キリスト、イエスが私共に與へなされたのは、『我なんぢらを受する如く爾曹も其隣を受すべし』と云ふことである、益々汎く愛を施し、之れを充分に行届かしめられんことを希望する。

活 基 督

第八章 基督の權威

そは學者の如くならず權威を有る者の如く教たまへば也馬太傳

七章二十九節

活 基 督

權威とは平たく云へば力と云ふことである、併したゞ力と申しては肉體の力もあり、智慧の力もあり、又心靈の力もあるが茲に權威とあるのは上より下に及ぼすのであつて、父母は息子娘に對して權威を有たねば、其の子供の教育が出来ない、先生は弟子に對し、又位の高き者は位の低き者に向つて權威がなければ管理が付かぬ、扱權威と云ふのは下の者より尊敬を受け、此方の云ふことは下の者に感服さるゝだけの實力である、其の實力のある人間であつたならば、確かに我下に從く所の者に向つて權威を有わけてである、下の者は悦んで其の權威の下に服し、隨喜の涙を溢すとか、渴仰するとか云ふことになつて來る、之に反し上に立つ者が權威を有たない場合は何うであらう、恰も支那の現天子の如く、傀儡扱にさるゝ、傀儡になつてしまへば國が治まらない、即ち上に立つ者が傀儡であつた日には、其下の方は紊れて麻の如くなるは自然の勢

活 基 督

である殊に宗教家に於いては眞正の權威を有つことが大切である。キリストが此の世に在らせられた當時に於いて、猶太の宗教家「パリサイ」人とか祭司とか學者とか云ふ類の者は何うであつたかと云へば實際の權威がなかつたからして、太二十三〇五六に在るが如く、只表面のことにのみ心を注ぎ、聖語を録したる幅の淵い佩經を附け衣の裾の幅を潤くして、多勢の集まる所では上席を占路を歩くときには人々より先々々と挨拶を受くることを悦ぶと云ふやうなことであつた。是れは獨り猶太ばかりではない、天主教會へ行つても、希臘教會へ行つても、法王とか宗長とか云ふやうな者が首領で、其下に大僧正あり、僧正あり、其の人々が壯麗はしき衣を着て、高い壇の上に座し、多くの信者を其の位其の衣其の袈裟を以て服さしめやうと云ふ仕組をして居る。近くは京都の兩本願寺を見ても同じやうなことであつて、七條の袈裟を懸ける

活 基 督

とか其の位々に準じたる衣を着るとか云ふやうな譯で、上の者が下の者を壓するばかりの權威を取らふと試みて居る。然るに主イエスキリストは大工の仕事を身に纏ひ、或は石の上に立ち、或は木の根に上り、或は船の中に在つて群がり來る人々に向つて聖語をなされたのである。當時のイエスキリストは未だ帽も冠らず、僧の服も着けず、大工其儘で人々の間に行動されたのであるが、主の御説教を聞いた者は、學者の如くならず、權威を有てる者の如く語したまへりと云つて、其の質朴なる其の僞飾のなき話に感服した。約七〇の終りには、未だ此人のごとく語りしものなしとあるのを見ても、イエスの聖語に如何なる權威が加はつて居つたかと云ふことが明らかに分る。主イエスは管に説教をなされるとか、説話をなされるとか云ふときばかり力があつたのではない、船の中でね眠りになつて居るときも、山の中で静かなる生涯をね送

りになつて居るときも亦ピラトの前に立つて沈黙して居らせられたときも自づから一種冒すべからざる所の權威がキリストの御身體には纏ひ附いて居つたやうに思ふ。

諸君王冠を戴き、王の衣を着て四輪車に乗つて走せ廻る所の帝王の前には、臣民たるもの誰か頭を垂れざらん、私は王服を着け、王冠を着けた所の帝王よりも冠を脱ぎ棄て、吾等の一人となり、吾等の間に立ち交つて居るかなれども、其間に何か謂ふべからざるの權威、謂ふべからざるの力が現はれ來つて、自ら私共の頭を低げしむる所の王者があつたならば、其人こそ真正の權威を有てる者として服従することが出來やうかと思ふ、今日日本願寺の活佛と稱へらるゝ法主から法衣だの袈裟だのを剝ぎ取り、通常の衣服を着せて御互ひの中へ放り込んだならば、果して何の威光を發射すべきか、只臭氣甚々として鼻を突くばかりであ

活 基 督

活 基 督

ろう、一向宗の振はざる決して怪しむに足らぬ、是れは獨り我本願寺ばかりではない、歐羅巴亞米利加之基督教會に於いても詰らない、牧師、詰らない、説教者が壯麗なる法衣を着て講壇に現はれるが、それでも未だ足らないから花の如き少女に成れる樂隊を備へ、以て人心を繋かうとするのを見るけれども、もう今日ではそんな兒戯に均いことでは不可ない、今日は世界何れの國に於いても、宗教家は眞個の權威を有たなければ成功することが出來ないと云ふ場合に、進んで來た實力を有する牧師、説教者の許には、聽衆は雲來霧集有様であるが、形ばかりの説教をなす所は、門前雀羅を張るの悲境を呈して居る。

今茲に考へたい問題は、キリストの權威は何所に存して居たか、何うして大工の衣を引ッ掛けながら、幅濶い衣を着けず、又悲しき佩經を眉間に翳さずして、權威を有ちなさることが出來たかと云ふのである。

活 基 督

第一 古今に卓絶する見識を有し先人未發の眞理を語りたまふた、平たく申せば古の人々が思ひ附かないやうな、また何千年経つても古びることのないやうな眞理を話したからであらうと思ふ試みに山上の説教を調べて看られよ、五〇二十一には「古の人に告げて殺す勿れ」と云ふ「我なんぢらに告ん假令人を殺さずとも兄弟を狂妄と云ふ者は審判きを免れない」とか、又其の二十七に「古の人に告て姦淫する勿れ」と云ふ「我なんぢらに告ん婦を見て色情を起す者は心の中すでに姦淫したる也」と説き尙其先きを見ると、また曰ることあり、また曰ることありと云つて古の人の云つたことは云つたこととして、キリストイエスは己が心中から湧出して來る所の眞理を以て是れでなくてはならないと云ふ教訓を指示になつた、終りに「古の人に告げて爾の隣を愛みて其敵を憐むべし」と言ふことあるは、爾曹が聞し所なり然れど我爾

活 基 督

曹に告げん爾の敵を愛み爾曹を誦ふ者を祝し爾曹を憎む者を善親し虐過迫害ものゝ爲に祈禱せよ如此するは天に在す爾曹の父の子とならん爲なり云々と教へたまふたが、是實に古の預言者が未だ曾て考へ及ばなかつた所の大眞理を捕へ來り之れを當時の人々の心の中に注ぎ込れたのである、話が一寸岐路に入るが、十九世紀の大説教者と云へば、ヘンリー・ウォールド・ビーチ、ヨル・プレデリック、ロバートソン・ピキリツクス、ブルツクスと云ふであらう、此の三子は成程一世紀間に林の如くに現はれ出た所の總ての説教者を凌いで、肩から上高かつたと申さうか、腰から上擡んで居つたと申さうか、奈何にも優れて居つた、其中に就いても、フキリツクスは、奈何にも高い、奈何にもエライ、説教者であつた、彼れは若年にしてヒラデルヒヤの片隅の教會を收つたが、三年経たない中にヒラデルヒヤの人々が皆ブルツクスの足許に

活 基 督

跪ひざまづいてしまつた、更に進すすんでポストンへ参まゐつたが、此このポストンは亞米利加アメリカでは學者の淵藪えんさくと云いはれる所ところである、而しかかも神學者の巢窟うらと云いはれた所ところである、其所そこへ乗込のりこんで行いつたときには、人々ひとびとが之これを見て如何いかなるブルツクスも此このニュー・エンランドの中心ちゆうしんである所ところのポストンへやつて來きては何なにが出來でるものかと云いつて嘲笑せうわうをいたして居ゐつた、けれども彼かれが其そののポストン中央ちゆうおうの三一教會さいいつくわいに立たつて説教せききやうを始はむると、一年いちねん経たない中にポストンが其そのの足許あしあとに跪ひざまづき、三年さんねん五年ごねんと經たつ間あひだには亞米利加アメリカ全國ぜんこくが跪ひざまづき、十年じゅうねん経たない中には英國えいこくが跪ひざまづいたと云いつても宜よい、即すなはち英語えいごの行なはるゝ所ところには此このブルツクスの力ちからが及およんで行いつたのである、其力そのちからを及およびした所ところのブルツクスはどんな人ひとであつたかと尋ねて見ると、何なにでもないときには滑稽おどけや洒落しやれが口くちを衝ついて出いて來きり、ブルツクスの話はなしを聽きく所ところの者ものは皆腹みなはらを糞うんつたと云いふ、即すなはち今講壇いまこうだんに登あると

活 基 督

云いふ瞬間しゆんかんまでは、四邊よっぺの人々ひとびとに對たいして洒落しやれを言いひ、串戲じやうげを云いつて、人々ひとびとに願ねがひを解とかせたと云いふのである、其人そのひとが講壇こうだんの上うへに立たち現あはれて一言ひとこと二言ふたこと説せき始はめると、之これを聽きく所ところの人々ひとびとは靜しずかになり、何か上うへよりの權威けんいを以もつて壓迫あつぱくさるゝ如ごとくに感かんじたと云いふのである、彼かれの力ちからは何所どこに在あつたかと尋ねて見れば、それは種々しゆしゆなる方面ほうめんに考かんがへ及およびさなければならぬ、是これは獨ひとりブルツクスばかりでなく、ピーチヨルやロバルトソンの説教集せききやうしゆをも開ひらいて御覽ごらんなさい、其そのの中には誰たれが斯かう云いつたとか、彼かれれが如ごとく云いつたとか云いつて、人ひとの云いつた言葉ことばなどは少しも引ひいて居ゐらない、殊ことにブルツクスに至いたつては聖書せいしよの語句ことばさへも引ひかない、大抵たいていな人の説教せききやうを聽きくと、イヤクリンストムが斯かう申ました、イヤヤーガスチンが斯かう云いつた、誰たれもは斯かう云いふ金言きんげんを話はなして居ゐると云いつて、自分じぶんに力ちからがないから、他たの人の善よい言葉ことばを借かり來きて、之これを糞うんぎ合あはして説教せききやうをするが、

活 基 督

大説教者は何人の言葉をも借り來らない甚だしきに至りてはキリストの聖語さへも借りて來ない、それならばブルツクスの如きはキリストを説かなかつたかと云ふと説教の初めから終りまでキリストに満たされてある、何うしたのだと云へば其のキリストを腹の中に入れて之を消化させて、其の消化れた所のものが説教となつて出て來たからして、聖書の語句は斯うだ如彼だと云つて一々之れを引かなくつても人の肺肝に鐵鎚を撃つが如くに懲いたのである、當時の人々がキリストの聖話を聞き學者のやうではない、權威を有てるもの、如く語りたまへりと云つて非常に感服したのは、全くキリストの腹の中に舊約聖書が消化されたばかりでなく、天地間にあるとあらゆる眞理が消化されてしまひ、天の父の懐に在りし所の其の眞理がキリストの腹を通して、其口を突いて出て來たのであるからして、何人も頭を下げざるを得

活 基 督

なかつた次第である、當時の人が頭を下げたばかりではない、二千年後の今日學者も、智者も、王者も、皆此キリストの聖前に頭を下げると云ふのは、全くキリストが千古萬古易りなき所の眞理を心の中に消化して、出たになつたことに基づくであらうと思ふ、第二は何であらうか、當時の學者間に行はれたる定式の信仰箇條、又は定まりの文句を用ゐずして多くは創始的即ち新機軸を、出たになつた平たく申せば、決り切つた文句や決り切つた信仰箇條などを繰返すのではなく、毎度も新たな衣を着けて、新たな眞理がキリストの口から出て來たのである、茲に私共が考へなければならぬことは、どんな立派な眞理でも、毎度々々同じやうに繰返さると、少しも心に感じ起らない、某教會に一人の牧師があつたが、講壇に立つて口を開けば、聖靈を受けなければならぬ、諸君宜しく聖靈を、受けなさいと云つて、三年一日の如くに繰

活 基 督

返した、聖靈の問題は極めて大切で極めて奥床しいものであるけれど、も三百六十五日の間何時講壇に立つても聖靈否一千日の間百五十度の日曜日の禮拜其他の集會に於いて聖靈を繰返されては何人も感ずる者がないやうになつてしまふたので、到頭右の牧師は其の教會を去らなければならぬやうになつた、然るにイエス、キリストの説教を開いて御覽なさい、空の鳥を見よ、野の百合花を見よと云つて、天然自然の例をね引きになるかと思へば、猶太の人に向つては、商賣の秘密からして、或は嘘言多き番頭の所業は斯うである、不義の財産を能く用ゐて、永生に至る道を考へよとか云ふやうに、人間の活問題を捕へ來つて説話をなされたと云ふやうなこともあるからして、キリストの聖語を聴く所の者は、毎度々々新らしい話を聴くやうに感じたのである、獨り當時の人々がキリストの聖語を新しく感じたばかりではない、私共の如き

活 基 督

も信者になつてから二十七八年の間既に山上の説教の如きは幾十度讀んだかも知れない、路加傳の放蕩子息の如きは幾百度讀んだかも知れない、けれども今日山上の説教を讀むときには、先日讀んだときには斯う云ふ意味を見出さなかつたが、今日は又斯う云ふ新らしい意味を見附け出したと云つて、新たななる土地に旅行するが如くに感ずると云ふのは、キリストの聖語の中に何か深い奥深い何か奥床しい眞理が籠つて居つたからして、今尙新らしく聖語を拜讀することが出来るであらうと思ふ、キリストが猶太の原頭立つて説教をなされてより世は幾變遷を來したかも知れない、十九世紀になつてからでも、どれくらゐ變つたかも知れない、けれども同じキリストの聖語が二千年の間詞として少しも變らないのに、讀む者の心をして新らしく感ぜしむると云ふのは、非常なる力があつたことを認めなければならぬ。

第三空前は勿論絶後とも云ふべき偉大なる人格がキリストの聖語に伴ふて居つたと云ふことである。諸君は御記憶なさるであらう。嘗て申したことがある、フイリックス、ブルックスが講壇の上に起つて六尺三寸もある所の而も三十二貫目もある大きな身體を前の方に横たへ手を舉げて説き始めたときには、之れを聴く人々がブルックスの中にはデビニチー即ち神々しいものが宿つてあると云つて自から頭を低げなければならぬやうになつて來たと云ふことである。ヘンリー、ソイルド、ピーチヨルは演壇に起つて白い手巾を出し其の頭を拭くと云ふのが毎日の習慣であつたが、何千人と云ふ聴衆はみな前の方へ頭を突き出して、岩間から流れ出づる眞清水を慕ひ、將に飲まんとするが如き状態を以て、ピーチヨルの口から出て來る眞理の泉に心の渴を止めんとして待つて居つたと云ふのである。是れは何の力であらうか。言葉

活 基 督

活 基 督

未だ發せざるも、其人のうち在る所の徳と云はうか、其人の内存する所の聖靈と云はうか、否、人格と云ふ方が適當であらうと思ふ。夫れが其所に現はれて來るからである。諸君は口が説教をすると思召すかも知れないが、口が説教をすると思召すか、落語家を雇ひ來て、聖書の語句を諳記させ、之を話させたら結構であるが、眞正の説教は五臟六腑を通し、夫れが結晶體となつて出て來なければ、人々の心の中に無限の感動を興ふると云ふ譯には行かない。キリスト、イエスは佛蘭西のルイナンをして、キリストの前にキリスト無し、キリストの後にキリスト無し、若しキリストに就いて驚くべき事があるとするならば、キリストの後にキリストの如き人物が出ないのであると叫ばしめた、斯る偉大なる人格が加はつて居るものだからして、斯る無限の力を及ぼして來たものであらうかと思ふ。今日我日本に於いて能く囁る説教家能く辯

活 基 督

ずる人は頗る多いのである。然るに其力が人々に及ばないのは何所に原因するかと尋ねて見たならば、此所です。胸を指して、全く此所に原因するのであらうと思ふ、して見ると私共の如き主に召されたる者は何が一番苦しいことであるか、何所を一番修業しなければならぬかと云ふと、此所(胸を指して)をイエスに依つて造り直すことである。キリストの聖姿が我衷になるやうに造り直すことが一番の苦心であつて、是れが最も力を用ひなければならぬ點である。さうして夫れが現はれて言語となり、それが現はれて風采となり、それが現はれて初めて其所に一種の權威を有つことが出来るやうになるのである。

諸君先きにも申し上げたやうに昔は衣を着け、袈裟を懸けて、高い壇の上には現はれたら、夫れて人々は承知をしたのである。今日は歐羅巴に於いても亞米利加に於いても、其の欺は喰はない、矢張り實力のある牧師

活 基 督

がありさへすれば、其の教會は音樂が夫程でなくても、教會の建物が夫程でなくても、其の教會には人々が群り來るのである。我日本に於ける基督教會は新たななるものであつて、昔からの習慣は、一も附いて居らない。或は讚美歌を謳へば、そんな御詠歌のやうなもの、止して貰ひたいと云ふ聽衆である。或は洋琴を弾けば、何だかブウブウと云はせるやうなもの、一向何うも感動が起らないと云ふ聽衆である。夫れならば、牧師が衣を着け、袈裟を懸けて出たならば、そんな抹香くさいことは廢して貰ひたいと云ふ聽衆である。其の聽衆に向ふ時に當つて、私が何を學んだら宜いかと云へば、直ちにキリストに行つて、其の大工の衣を肩に引懸け、大いなる威嚴を以て人々の前に説教されたるキリストを學ばなくてはならないことである。其の説教をなされるとき、威嚴あるキリストを學びたいと思ふならば、山の中へ入つて祈禱をなされたるキ

活 基 督

リスト嵐の最中に舟の中で安眠をなすことの出来たキリスト、ピラトの前に起つて奈何に辱しめられても、いかに苦しめられても黙念として何か其所に一種冒すべからざるの威光を備へて在られたキリストを學ばなくてはならない。

尙ほ諸君に申し上げたいことがある。今日の我日本に於いては、牧師説教家だけがキリストに倣ひ如何に權威を有たうとしても、會員諸君即ちキリスト信者たる者が一家の内に於いて父らしく、母らしく、其の息子娘の上に權威を及ぼすことが出来なかつたら無益である。何うですか、或は學校に於いて天下の子弟を預つて教育する所の教師其人が子弟の上に右ね話申すが如き權威を持つことが出来なかつたら無益である。奥さんが下女を使ふときに、其の下女が奥さんに嘲弄ひ鼻の先で返辭をするやうなことであつたら決して其の一家は治らない。或は諸

活 基 督

君が多くなると手代番頭を使つて事を行らうとなさるときに、彼等が目の前ではハイ／＼と云つて頭を低げるが、一方に於いてペロリと舌を出し、ナイニ力のない爺が何を云ふかと云つて密かに譏るやうなことであつたら、店の整理が着かないであらう。諸君は此頃の番頭手代は狡猾で仕方がない。今日の息子や娘は親の云ふ事を聴かない。或は學校の生徒が同盟をして先生に背いたりするが、賊に何うも始末が着かないと云ふやゝな悪口をお聞きなさるであらう。けれども權威のある主人權威のある父母權威のある先生が、チャンと其所に控へて居つたならば、恰も文鎮を以て紙を押へた如く、どんな風が吹いて來ても、その紙は吹き飛ばさるゝやうなことはあるまい。

右の如き譯であるからして、私共が他の物に力を及ぼして其功を奏することが出来たならば、一家内は靜かに治まり、學校の教育は其の實を

擧ぐるであらう、又天下の上に立つ所の者が右に話申すやうになつたならば、天下は治るであらう、或は教會の牧師執事達が其の氣風になつて行つたならば、教會は能く齊ふ而已ならず、駸々乎として進むやうになり行くであらう、併し此の權威を有つと云ふことは、獨り牧師傳道師ばかりでなく、總ての人の上に立つ所の者はみな之を有たなければならぬ、今日此所に集りの諸君は一人として人の上に立たれない者は、ない、諸君には子弟、妹と云ふ者があるであらう、假令夫等の者が、ないとしても、其年齢の上から云へば、十二になる人が十一になる人に對しては、即ち長者として立たなければならぬのであるから、矢張り一種の權威を有たなければならぬと云ふことを考へて見ると、誰でも彼れでも、權威を有たなくてはならないことは明白である、或は又れ婆さんの如きは、私等はそんなむづかしい話を聴いても到底分るものではない

基督の權威

基督の權威

とれ斷念めなさるかも知れないが、それでは不可ない、日本の御隠居さんと云ふものは、非常な權威があるもので、故今村謙吉氏の如き時には、頑迷と云ふやうな甚い拗強者であつたが、其の謙吉氏が何か怒り出して家中を狂ひ廻ると云ふときに、其の母親が謙吉と一言云はれたら、六十に近い謙吉氏がたゞハイと云つて小さくなり、其の母親の説諭の下に服し、過失を改めたことなどを考へて見ると、實に母親の權威は大いなるものである、即ち今村謙吉氏の母親の如きは、財政の上に於いて、一家を治むる上に於いて、基督信者としての徳に於いて、謙吉氏以上であつたから、彼は其の命令に服したのである、斯くの如く述べ來つて考へて見ると、れ爺さんでも、れ婆さんでも、みな非常なる權威を有つことが出来る、併し其の實力がなくして、權威を有たうとすれば、眼下の者は之れに従はないであらうが、苟しくも實力と云ふものがあるな

らば必ず之れに従ふものである。其の權威を得るやうに、我々はキリストの前に立つて、心靈上の實力を養はんことを勉めたいと云ふのが私の諸君にね勧め申したい要點である。

第九章 基督の犠牲的精神(聖餐式)

蓋人の子の來るも人を役ふ爲に非ず、反て人に役はれ且れほくの
人に代その命を予て贖とならん爲なり(可十、〇四十五)

凡そ天地間に於いて金石草木などの如き、無心無情の境界に存する物體に就いては、己れを棄て、他の者の爲にすると云ふ犠牲の精神があるかないか、之れを定むることは餘程難かしい問題である。生物となつても極めて下等なる蟲介魚の類には何うであらうか、之れには犠牲となる精神が現はれて居るや否や、是れも餘程定むることが六つかしい、

活 基 音

活 基 音

けれども此の世界の構造或は天地の理法に就いて考へた學者中には、能く分らないけれども何か其間に犠牲となるやうな傾向だけは見えて居ると云ふ人もある。ダルウインが進化論を唱へた當時に於いては、優勝劣敗即ち強い者は弱い者の肉を啖ひ、大の蟲は小の蟲を殺すと云ふやうな極めて冷酷なる考を以て生物の生活の狀態を考へたのであるが、其後段々と學者の中にはイヤさうばかりでもない、何うも高等なる動物即ち鳥獸の群に這入つて見ると、吾人人間も三舎を避くるばかりの犠牲の精神が現はれて居る、それは斯う云ふ例があるとか、如彼云ふ例があるとか申して、此の世界は決して強い者が弱い者を苛めると云ふだけでは成立つて居らない、強い者は弱い者の爲を圖り、大なる者は小なる者に使はるゝと云ふ理法の其間に備はつて居ると云ふ説を揚げて來つて、大いに優勝劣敗の道理に對して、尙それよりも優れる理法

活 基 督

が此の世の中に存することを現はしたのである。
 曾て或婦人より鳥飼の經驗談を聞いた曰く「恰ど先日雌鳥に十六の卵を抱せたが二十一日の間其の卵を抱いて居るのに能く氣を注げて見ると始終雌鳥が其の卵をクルクルと廻して居るやうだ。下になつた方は冷たい腹に當つた方は温かであるからして何うも廻して居るやうに思はれる、そこで印を附けて見た所が果して廻して居るのであつた。それから其の初めの十八日間は一日に一度だけ鳥屋を離れて餌食を求めに出て行つたが其の雛が生れる三日前からは全く斷食で卵を抱いて居る、それから愈々雛が孵つて出てから行つて見ると其の十六の途中で一ツだけは廢物になつたが十五は立派に孵つた、さうすると此の雌鳥は十五の雛を羽翼の下に入れて抱いて寝て居る、能く氣を注げて見ると其の雌鳥は毎も中腰になつて立つて居る、自分の足を曲げて寝

活 基 督

れば下の雛が下敷になるから下敷にならないやうに半分足を舉げ人間で云へば中腰と云ふ有様で一夜その雛を抱いて寝て居る、さうして食物を見付け出すと、クック云つて子鳥を呼んで喰べさせる」と私は其の話を聞いて今更の如くに感じた、キリストは雌鳥が雛を羽翼の下に集むる如く、われ爾曹を如何ばかりか愛すると云ふ聖語を吐きになつた、また舊約書を開いて見ると其の中に神は羽翼の下に人間をね守りなされると云ふ真理が鏤いてあるが、其邊は全く此の雌鳥が犠牲の精神を以て我子を育つると云ふ此の天然自然の法則に基いての感じであり、教訓であらうかと思ふ、其間雄鳥は何も爲さないかと云へば是れは其の卵を抱へて居る所の雛を保護するが爲に、また雛が生れて來れば之を保護するが爲に多少犠牲の精神を現はして居るけれども雌鳥に比べて見たならば、其の精神の現象は十分一もないだらうと思

活 基 督

ふ、虎や、獅子や、狼の如き猛き獸類でも、我産んだ子供を愛護すると云ふ點に於ては、決して此の雌鳥に劣らないものを有つて居る。さて人間の生活の情態の如何、我日本の歴史や支那朝鮮又は歐米諸國の歴史を緋いて見ても、國の爲人の爲に力を盡した犠牲的人物を歴史上から消してしまつたならば、其の國史は實に乾燥無味で、殆んど讀むに堪へない、唯冷かなる優勝劣敗の悲劇となつてしまふだらうと思ふ。けれども其の國には矢張り昔から今日に至るまで、己が身を忘れて人の爲にするると云ふ、其の犠牲の精神に富んだ人物が現はれたものであるから、其の歴史を讀むに當つては、或は勵まされ、或は感じ、我も亦斯る犠牲の精神を以て此の世の中に立たなければならぬと云ふ考が起るものである。又家庭の有様を考へて見ても、同じことである。今日理想に叶つたる良い家庭と云ふのは何であらうか、即ち父も母も息子も娘

活 基 督

も、其の家の内の者は大より小に至るまで、残らず己れを忘れて家内の者の爲に盡すと云ふ、犠牲の精神の最も熾なるであらうと思ふ。若し其の家庭から犠牲の精神が取去られたならば、夫は其の妻を役ひ倒さうとする、其の母親は息子、娘、下女、下男を役ひ倒さうとする、息子、娘までも眼下の者を役ひ倒さうとする、さうなると嫉妬、怨恨、不平、あらゆる穢いものが満ちく／＼て来るから、實に目も當てられない修羅の巻を現はすであらう、また今日斯うして御互ひが此の世の中に立つと云ふ、自分の歴史に就いて考へて見ても、父母、兄弟、姉妹、或は先生などが己れを忘れて、或時は涙を流し、或時は骨措みをせず、跪して呉れたから、今日あることを得たのである、今日私が説く所の犠牲の精神と云ふことに於ても、矢張り天然の美を圓滿完全に發揮したものである、鳥獸の世界に於いても、御互ひの家庭に於いても、亦社會に於いても、此の高等動物の間

活 基 督

に現はれ来る所の犠牲の精神は、キリストに因つて到れり盡せりと云ふ所まで發達をしたものである。

それで私に向つて基督の教の主意は第一に何であるかと尋ぬる人があれば犠牲の精神であると答へたい、第二は何であるかと尋ぬる人があつたならば第二も亦犠牲の精神と云ひたい而して第三は何であるかと尋ねられたならば第三も亦犠牲の精神であると申したい、腓二〇六七に、使徒パウロがキリスト、イエスの世に降りたまふたこと、及び其の御生涯を極く簡短なる語を以て言ひ現はして居る、曰く「彼は神の體にて居りしかども自ら其神と匹く在るところの事を棄難きことゝ意はず、反て己を虚らし、僕の貌をとりて人の如くなれり、既に人の如き形状にて現れ己を卑し死に至るまで順ひ十字架の死をさへ受くるに至れり」と天上き位を棄難きことゝ思はずして、此世に降つたと云ふのが犠

活 基 督

牲の初めである、さうして三十三年の生涯は僕の如くにしてね過しになつたと云ふのが犠牲の生涯である、遂に十字架の死をね受けになつたと云ふのは犠牲の生涯を完うなされたと云ふ意味である、使徒方をね取りなさるときに第一の要件として示しになつたのは何であるか、可八〇三十四と三十五に「若し我に従はんと欲ふ者は己を棄て、その十字架を負て我に従へ、そは生命を全うせんとする者は之を喪ひ、我ため且福音の爲に生命を喪ふ者は之を得べければ也」と録してある、我使徒になりたと思ふならば己れを棄て、十字架を負ひて従へ、云ふのは犠牲の精神がなかつたならば何が備はつて居つても我使徒となる資格がない、我使徒となるのには兎にも角にも己れを棄つると云ふ覺悟がなくてはならない、此の生命を大切にするやうな人間であつたならば永生を失うてしまふ者だと斷言をなされたのである。

活 基 督

諸君私が本文に引いた可十〇四十五はキリスト御自身の聖語であつて、實に其の精神を遺憾なきまでに言顯はしたものであるまいかと
 思ふ、曰く「人の子に來るも人を役ふ爲に非ず反て人に役はれ且たほくの
 人に代その命を予て贖とならん爲なり」と此のキリストの御精神は
 人を役ふ爲ではない、人に役はるゝ爲に此の世の中に降つたと云ふの
 であるが、是れが基督教の初りであり半であり終りである、此の精神を
 以て貫くのが基督教であらうと思ふ、若し夫れイエス、キリストがたゞ
 斯くの如き聖語を空に吐きになつたならば此の基督教も亦他の教
 の如く空しく過ぎ去つてしまつたかも知れない、たゞ此の基督教が他
 の教と異なる所は犠牲の精神を以て我に從へ犠牲の精神を以て立た
 なければならぬと云ふので、此點が基督教の主眼である、キリストは
 御生涯の間何をなされても、其行動は悉く犠牲的であつて、總身悉く犠

活 基 督

牲の精神に満ちて在らせられたことが分る、空飛ぶ鳥は巢あり地に這
 ふ獸は穴ありされど人の子は枕する所なし」と云ふのは何であらうか、
 又イエスが多勞の人々に詰め掛けられて、食事をなされる暇さへなき
 とときでも、病める者憐める者を伴つて参つた場合には、直ちに之れに對し
 て眞實なる愛憐の心を現はしになつた、蓋し其の衷に犠牲的精神が
 満ち溢れてあつたからである、犠牲に二種あり、一は毎日々々犠牲とな
 ると云ふので、羅八〇の終りに「われら終日なんぢの爲に死に付さる」と
 あり、他は此の生命を抛つて全く槍玉に擧つて死ぬると云ふのである、
 三百年前我國に天主教が傳はつた時分には、其の槍玉に擧つて犠牲の
 死を遂げた者が随分多かつた、明治の今日に於いて主イエスに從ふ所
 の者が時に石で頭を破られたとか時に暗擧に遭ふたと云ふやうなこ
 とがあるけれども、未だ曾て一人として槍玉に擧つて死んだと云ふ者

活 基 督

はない、併しながら私の考ふる所では、槍玉に擧げられて死ぬる犠牲の生涯と、毎日々々死に付さるゝと云ふ犠牲の生涯とは、何方が困難であるかと云へば、寧ろ毎日々々死に付されなければならぬと云ふ生涯の方が餘程困難だらうと思ふ。主イエスの犠牲の生涯に於いては、此二つを兼ねてある即ち毎日々々右から左から前から後から攻道具に掛けられた如くにして極めて苦難の生涯をお送りになつた、さうして最後に諸君の知らるゝ通りゲツセマネの園に於いて血汐の滴るが如き汗を流して、終に十字架の上に釘附にされ、悲惨の最期をお遂げになつたのである、殊に十字架の死と云ふのは、犠牲の生涯の冠であるとして申しても差支はない。

けれども諸君唯今まで論じたる所は専ら我四邊に在る所の同胞兄弟姉妹の爲に己の身を忘れて盡すと云ふ犠牲の生涯であることを意味

活 基 督

するのである、併しそれだけのことであるならば何所の國の歴史に於いても随分立派なる犠牲の生涯を送つた人物を見出すことが出来る、若しキリストの御生涯がたゞ我同胞兄弟姉妹の爲に盡すと云ふだけの犠牲の生涯であつて、それ以上即ち其の奥には何もなかつたと云ふとであるならば、此の千九百歳の歴史を通して及ぼすが如きキリストの大感化は、見ることが出来なかつたかも知れない、人の爲に盡すと云ふ犠牲の生涯以上に何かがあるかと云ふのが問題であつて、即ち神に對して犠牲となると云ふことである、この神に對して犠牲となると云ふのは、一言に申せば、全き服従と云ふことである、一寸其の語を聴きなると、神に全く従ひ申すと云ふことは、左程困難なることではない、やうに思はるゝけれども、眞個に神に向つて全き服従をなすのは、己れを忘れて人の爲にすると云ふ犠牲の生涯に比べて見ると、何れくらゐ

活 基 督

六つかしいことであるかも知れない、キリストの犠牲の御生涯に就いて見ても、人の爲にすると云ふ間は、格別の御苦心も見えなかつたが、イザ神の聖前に犠牲となつて、全き服従をなされると云ふ場合には何うであつたか、我心いたく憂へて死ぬるばかりなり」と云ふ聖語もあり又「若かなは、此杯を我より離ち給へ」と云つて、三度まで汗を流して、祈りなされたこと云ふこともある、即ち苦心、慘酷、非常なる心の戦ひを経て、「初めて我心の従を成んとするにあらず、聖意に任せたまへ」と云ふ全き服従の祈禱が出て来たのである、此の祈禱が出て来たときには、恰も陰雲全く晴れて、見々たる明月の橄欖山頂を照らすあり、キリストの心事はたゞ聖意のまゝを成すに在りと云ふ他なかつたのである。私共もイヤ慈善の事を行らなければならぬ、イヤ克己の精神を持たなければならぬと云つて、人間に對するときには、充分ではないけれ

活 基 督

ども餘程出来易いのであるが、我心の奥の奥までも見通しなされる所の天父の前に立つて、種々様々なる試練や誘惑が打ち來るときに、我心の従を成んとするに非ず、聖意に任せたまへ」と云つて、全き服従を爲すことは、實に困難の中の困難である、キリストが此世を去りたまうてより以來、今日に至るまで千八百六十年の星霜を経たが、此の二千年近くの長の鳥兔の間に於いて、此のキリストの全き服従の跡を踏み、さうして天父の前に犠牲の生涯を送つた所の者は誰であらうか、それは種々なる人物の名が擧るであらうけれども、私はクレルオーのベルナルドとアンシツシのフランシスであらうかと思ふ、長くなるからベルナルドのことは省いて、フランシスのことを少しく申上げて見よう、此のフランシスの父親は非常なる有福家であつたから、フランシスも若い時には王侯貴人と交際をなし、貴族達が金銀財寶を秋山の木の葉を散らす

が如くに蒔けば、フランシスも負けずに父君の金子を貰ひ受けて之れを蒔き散らし、其生涯は奢侈を極めたものであつたところが一日彼は深く感ずる所があつて、かゝる華美な生涯を廢めて貧乏の生涯に變りたい自己中心の生涯を投棄して、全く神中心の生涯を送りたいと思ひ、蹶然我家を飛び出してアシッシの近傍に在る破寺へ逃げ込んだ。すると父親が親族の者と共に追ッ駈けて來て、種々に説諭をしたかなれども、もうフランシスは一旦出家をいたしたものであるから、決して父の家には歸らないと云つた。遂に父君がフランシスを裁判所に訴へたので、彼は拘引せられ、さうして法廷に於いて自分の信仰を云ひ現はした。ところが父君はさう云ふ次第であるならば一厘半毛の金子も與るところが出来ない、其の着て居る所の衣服までも返すやうにと申した。其の語を聴くとフランシスは鎖褌を外して素ッ裸體になり、之れを父君の

活 基 督

活 基 督

前に差出し、丸裸體のまゝ、裁判所の門を出て、寒風凛烈と吹き頻る中を意とせずして破寺に進入り、或人の情に依つて何か腰に纏ふべきだけの物を貰ひ受け、爾後彼は神の聖前に出て『偉大にして榮ある神よ、爾主イエスよ、我願望は爾の光を照して我心の暗を除きたまはんことを、我は萬事に於いて爾の聖意に従つて行はんことを希ふ』と云ふ祈禱を捧げて手を拱いて考へて居つたときに、精神恍惚として主イエスが十字架の上に釘りたまふたる其の榮が我身に映じ來り、確かに神が我祈禱を聴きたまふたことを確信するに至つたと云ふ、それより後フランシスの生涯は萬事キリストを通して、天父の聖意に従ひ萬事キリストの聖足跡を踏むと云ふことになつてしまつた。彼は四福音書を讀んで文字の通りに解釋し、『我よりも父母を愛する者は我心にかなはざる者なり』父母を棄てた我よりも妻子を愛する者は我心にかなはざる者なり』

活 基 督

生涯妻子を持たなかつた。我よりも其の財寶を愛する者は我心にかなはざる者なり。總ての財寶を悉く打棄て、しまつた。さうして四十幾年の生涯と云ふものは全く犠牲の生涯であつた。彼が街頭を歩けば天の鳥が来て其肩に降り、また食卓に向へば野鳥来て共に食事を取ると云ふやうな譯で感化は四邊に在る所の人間に及んだばかりではない。空の鳥までも欣然として彼を慕ひ來た位であつた。フランシスくらゐにキリストの愛を眞實に實行した者はなかつたと申しても差支はない。今日我日本に於いて彼所でも此所でも、曰く社會主義の基督教、曰く道徳主義の基督教と云ふ聲が聞ゆる。其の説く所や極めて可しけれども之れを説く所の人々がフランシスのやうに使徒パウロのやうにイエス・キリストのやうに偉大なる感化を及ぼすことが出来ないのは何に原因するかと尋ねて見たならば、先輩が人に對して盡した人道だけは

活 基 督

學んで居るけれども、其の人々が人道を盡すと云ふ犠牲の精神の奥底に主イエスを結び附けて、主イエスが現はしなされる天の父に心の奥底から服従すると云ふ如何にも奥深き如何にも高尚き所のものがないからである。然るにベルナルド又はフランシスの如きは、其心の奥底に如何にも奥深き如何にも高尚き所のものがあつて、人間の最も困難とする所のものと戦ひ、遂に之れに打ち勝つことが出来たからして、斯様に美事なる生涯を送り得たのである。丁度富士山に雨が降る、其の雨が巖石の間を通り、清水となつて現はれ出て、後には潺々と流るゝ所の溪川の水となつて落ち來るが如く、私共の衷に深く養はれた此力が四邊の人々に押及んで行くのではあるまいかと思ふ。我日本に於ける武士道或は大和魂と云ふものは何であつたかと云ふと、人の爲に己れを捐つると云ふ犠牲の精神を發揮したものであらうと思ふ。これ

活 基 督

ども基督教はそれよりも尙高尙いので更に神の聖前に犠牲となるのである。私共は心の中に其の精神を得なければ、今日我四邊の人々に對して眞個の犠牲となることは難しいであらうと思ふ。今諸君と共に麴包を擗いて食し、葡萄酒を一滴づゝ飲むのは何であるか、哥林多前書十一章を讀んで見ると使徒パウロが「主イエス賣るゝ夜パンを取り祝して之を擗曰けるは取て食せよ此は爾曹の爲に擗るゝ我體なり爾曹も如此ねこなひて我を憶よ」と云つて居るが是れは何を憶ゆるのであるか、キリスト、イエスが神の聖前に全く服従なされた犠牲の生涯と私共人間の爲に生命を捐つゝ死になされた其の犠牲の御生涯を紀念すると云ふのが此の聖餐の意味であらうと思ふ。

第十章 死に對するキリストの心情

活 基 督

此時よりイエスその弟子に己のエルサレムに住て長老祭司の長學者等より多の苦みを受かつ殺され第三日に甦る等なすべき事を示し始む(太十六〇二十一)

キリストの生涯は遂に苦痛と死を以て終らねばならぬことは何時頃から自覺なされたか、これは後に説明することとして先づ何時頃から公言されたか、之れを研究して見たい。

キリストの御生涯は二期に分れてある、第一期はガリラヤ傳道の生涯と申して馬可傳では一〇から九〇迄、路加傳では四〇十四より十九〇五十迄である、第二期はエルサレム及び其の附近に於ける生涯と申して馬可傳では十〇以下、路加傳では二十〇以下に録してある、約翰傳の如き其の大部分は第二期の生涯に於ける出來事及びキリストの説話を録したものである、ガリラヤ公生涯の終りの頃にキリストが使徒方

活 基 督

を引率れてサイロ、ペニシヤの山里へ越しなされ、山高く水清き別乾
 坤に在つて精神爽快となり、殊に宗教上の奥妙なる問題を考ふるには
 恰好の場合となつたときに使徒方に向つて世の人は我を何と取沙汰
 してあるかと尋になつた。するとペテロが衆に先んじて「爾はキリス
 ト活神の子なり」と言明したれば、非常に悦びになつて「ヨナの子シモ
 ン爾は福なり、蓋し血肉なんぢに示せるに非ず、天に在す吾父なり」とお賞
 めになつた。其後使徒方に向つて死の話をなされたが、彼等はキリスト
 が地上に於いて一大王國を建設された曉には、各々國務大臣となつて
 政權を握りたいと云ふ夢を見て居つたから、キリストが死すると申さ
 れたことは、所謂寐耳に水で非常に驚き、殆んど呆然自失すると云ふ有
 様であつた。そのときペテロは「主よ宜らず此事なんぢに來るまじ」と申
 上げた。くらゐで、キリストの死に對して使徒方には何の準備もなかつ

活 基 督

たのである。爾來キリストも死の問題に關しては使徒達を充分に教育
 して置かなければならぬ。イザと云ふ場合になれば進退度を失つて、目
 も當てられぬやうな醜狀を呈し、折角キリストがね授けなされたる大
 使命を完うすることも出来なからうと思召して、大いに死に對する教
 育をお努めなされた。太十六〇二十四に「若われに従はんと欲ふ者は己
 を棄その十字架を負て我に従へ、そは生命を保全せんとする者は之を
 失ひ我ために其生命を失ふ者は之を得べければ也」と申すことがある。
 即ちキリストの門弟子たらんと欲する者は死ぬる覺悟で來いと云は
 れたのも同様である。可九〇三十一に「人の子は人の手に付され、彼等に
 殺されてのち第三日に甦るべし」と録してある。約三〇十四には「モーセ
 野に蛇を擧し如く人の子も擧らるべし」と出てあるが、これもキリスト
 が十字架に擧げらるゝ預言のやうに思はれる。同十〇十四に「善牧者

は羊の爲に生命を捐つ同十二〇二十四には、敵に實に爾曹に告ん一粒の麥もし地に落て死すば唯一にて存んもし死ば多の實を結ぶべし是等の聖語を綜合して考ふれば、キリストは死すしては救の大道を立つることが出来ない其の使命を完うせんが爲には何うしても一命を捐てなければならぬと覺悟をして居られたやうに思はれる。

そこで最初の問題に立歸つて何時頃から死の自覺がキリストの腦中に起り來つたか之れを考へて見たい、イエスがね生れになつて三十三日目に母のマリアと父のヨセフが其の嬰兒を携へて、エルサレムの神殿に登つたときに、シメオン翁がマリアに向つて「此嬰兒はイスラエルの多の人の類て且興らん」と誹駁を受ん其號に立らる、これ衆の心の念の露れんが爲なり又劍なんぢが心をも刺透べし」と云ふ激しき言葉を申し聽かしたことがある、マリアは是等のことを其の心に留めぬと

活 基 督

活 基 督

録してあるが、イエスをお育て申す長の年月の間には、多分母の口から其のシメオンの言葉がキリストに漏れたかも知れない、またキリストが舊約聖書をお讀みなされるときに、賽五十三〇には神の義僕のこと、が録してある即ち其の三節に「かれは侮られて人にすてられ悲哀の人にして病患を知れり、また面をおほひて避ることをせらるゝ者のごとく侮られたり」其の七〇に「彼はくるしめられるれどもみづから謙だりて口をひらかず、屠場にひかるゝ羊羔のごとく毛をきる者のまへにもだす羊のごとくしてその口をひらかざりき」其の八に「かれは虐待と審判とによりて取去れたり、その代の人のうち誰かかれが活るものゝ地より絶れしことを思ひたりしや、彼はわが民のとながの爲にうたれしなり」イエスが此邊を讀まれたときに、自分も天の使命を完うせんが爲に正義仁愛の道を盡せば、世の人から必ず虐待せらるべきことはお悟りに

なつたであらう、また詩篇を御愛誦なされたであらうが、其中には義人が不義の者の爲に非常なる虐待を受くことも録してある、これもキリストに取つては如何に悲惨なる最期を遂げなければならぬかと云ふ覺悟に對して大いに強むる所があつたであらう、尙またエルサレムへ上りになつて救の大道を宣傳する、場合には「パリサイ人もサドカイ人も學者もヘロデアの輩も多少道理の解つた人々が擧つて己れに反對する有様を見られたときには、事々日々非なりであつて、斯くの如き反對があるからには何うしても死なずばなるまいと云ふ念慮を強められたであらう、而して其の死を公言されたのは先きにも申した如く、ガリラヤ傳道の終りの頃であつたが、之れを公言される以前に確かに死に就ける自覺が起つたものに違ひなからう、斯く覺悟を決めて在らせられたにも拘はず、いよく死期が切迫するに従つて「我

活 基 督

活 基 督

心いたく憂て死るばかり也」と嘆息の聲を漏したまふたこともある、また捕拿に就かるゝ前にゲツセマネの園中へ這入り、天父の前に跪いて「若かなは、此杯を我より離ち給へ」と苦悶の餘り血汐の如き汗を流しつゝ、三度まで同じことを繰返して祈られたのであるが、一寸其の嘆息の聲を聴き、また祈禱の状態を観るときには、恰ど死を恐るゝが如くに見ゆるけれども、キリストの門弟子と云ひ、又其後の信者と云ひ、教の爲に殺さるゝ場合に於いては、たのしく欣然として讚美歌を謳ひつゝ、死を見る跡るが如しと云ふ有様であつたから、空前絶後の大人物と云はれ、また神の子とも稱へらるゝキリストが豫て救の大道を完うせんが爲に死ぬると門弟子に示して居りながら、イザと云ふ場合になつて死を恐れたまふ筈はないことである、そこで古來學者達も如何なる譯で死を恐るゝが如き状態を現はしになつたかは、大いに腦漿を絞つ

て考へたことであつた。私共もこの事に就いては大いに研究をして見たが、なかく意味深遠で了解に苦しんだ次第であつた。いま學者達が此の問題に就いて如何なる説明を試みたか、茲に之れを列擧して、最後に私の考を申上ぐることにしやう。

獨逸あたりに林の如く起り來つた唯理論者が死を恐れる觀念は肉體を有てるものゝ免るべからざる弱點である。イエスも吾人と等しく肉體を有たれたが故に、死の近づくことを恐れられたのは當然である。云つて居る、チビンゲン學派の首領と仰がれたストロアスはキリストの死は歴史的と云ふよりも寧ろ詩歌的であると申したが、これは如何であらうか。ゲツセマネの園の祈禱よりして十字架上の最期に至るまでの状態を眞面目に研究して見れば、血あり涙ある空前絶後の出來事に對して甚だ輕躁なる説明と云はねばならぬ。佛蘭西のルナンが死は

活 基 督

活 基 督

萬事を終るべきものなる事とガリラヤの清泉やこれを汲みに出でたる少婦等をキリストが追想なされたときに、人情の弱點が現はれて、死にたくないと言ふ情魔に驅られたのだと申して居るが、劣等の人物ならばイザ知らず、キリストの如き高潔なる人格に對して斯の如き批評を下すのは、餘りに禮を失したるものと云はねばなるまい。またストロアスの弟子分とも云ふべきカイムは「キリストと雖も人間であつたから、實際死を恐れたまふのだと事もなげに評下して居る。またニアンドルはどうか死の苦痛だけは免かれないとキリストが求めたまふたのであつて、死なずして救の大道が完うせらるべきものならば、死なずして其の道を立てたいものだ」と云ふ祈禱をなされたと申して居る。カルピンはキリストが世界の罪惡を双肩に擔はれたから、非常なる苦痛を感ずると共に死を恐るゝと云ふ心も彌増して來た故に、此の杯

を離ちたまへと祈りなされたと云つて居る第四世紀頃に伊太利の
 ミランに於いて大説教者の名を轟かしたるアンブロイスは、キリスト
 の死を恐れ給ふたのは自己の爲ではなくして、全く人類の爲であつた
 と申して居る。當時歐米に於いて神學の大家と仰がる、オツクスフォ
 ードのフエーベルン博士は死を恐れ給ふたのではない、全く死を來す
 べき状態を厭はれたのだと申して居る。これは前に述べた説明に比べ
 て見れば、非常に奥深いものゝ如くに思はれる。キリストは人情の極致
 を得た方であるから、その十字架に釘けらるゝことは覺悟の前であつ
 ても、いよゝ殺されると云ふ場合に於いては、誰かキリストに對して死
 の宣告を下さなければならず、罪なき人に對して死の宣告を下す其の
 人々の心は水よりも冷かに石よりも頑固であるから、人情忍び難きの
 所を忍んで、何か名譽利達の爲に曲げて無辜の人を殺す其の心情を思

活 基 督

ふときにはキリストが堪へられなかつたであらう、また十字架上に釘
 殺すると云ふ場合になれば、誰か手を下してキリストの掌に釘を打た
 ねばならず、また脇腹へ槍を突き立てねばならず、何うも上官の命令と
 はいへ罪なき人を無法の手を以て殺す其の冷酷なる状態を思はれた
 ときには、矢張りキリストの心には堪へ難かつたであらう、また門弟子
 だの母のマリヤだの、また多くの女達が其の十字架の下に來り、堪へ難
 きの涙を押へて死に就くキリストの最期を見届くる其の情態を思は
 れたならば、傷が寸断するの思ひをなされたであらう、斯くの如く種々
 様々なる厭ふべき事柄がキリストの死に附帯して來るものであるか
 ら、死なすして濟めば死なすして使命を完うしたいと思はれたと云ふ
 のである。

活 基 督

私は前數説を考へて見たが、何うもそれでは未だ満足の出來ない所が

ある古今の諸大家が説明されたのに、それ以上の説明を爲すことは到底出来ないのであらうかなれども、私の考ではキリストが死を怖れられたのは全く不孝者に對する親の心情であつたらうと思ふ例之へば茲に親を養ふべき世嗣子が放蕩三昧に身を持崩し、幾度之れを諫めても馬耳東風で何の効驗もない、遂に親より譲り受けた資産を蕩盡し、もう今日となつては一人の生存れる母親さへも養ふことが出来ぬ場合となつた剩さへ日々母に對して不平不足を唱へ己がなしたる悪事は棚に擧げて母を怨むやうな次第になつた母は彼れや是れや常ならぬ苦惱の爲に病氣を醸し、將に死なんとする場合に差迫つた其時に母親は自分は今死ねば浮世の苦痛を脱する、ので幸福だが後に生残る所の我子は放蕩の結果家産を蕩盡し、日々不平不満を以てわれを責めた結果斯の如き大患に罹つたのである、して見る

活 基 督

活 基 督

と自分が死ぬるのは全く不孝者の爲である、自分は死んで幸福だが斯る親不孝者は天が之れを憎み給ふから決して前途善いことはあるまい、必ず此の怨恨を受くるであらう、して見ると自分は養生が出来るだけ養生をして死を免れ、さうして彼の不孝者を眞の人間に立歸らせたものである、去りながら自分が死なねば彼れの目が覺めまい、如何なる不孝者と雖も其の不孝の結果親が大患に罹つて死んだと云へば定めて本心の眞に墮たれ、先非を悔いて眞正の人間になるであらうか、死ねば我子が救はると云ふ譯ならば、死も亦辭せないと云ふが如き親の子に對する情愛は實に言語に盡すことの出来ぬものである、主イエスが三十三年の間殊に終りの三年間は千々に心を碎いて罪人なる人類を正道に立歸らせやうと盡瘁され、また非常なる愛心を以て誘導を努められた、然るに當時の人々は恩に報いるに仇を以てすると